

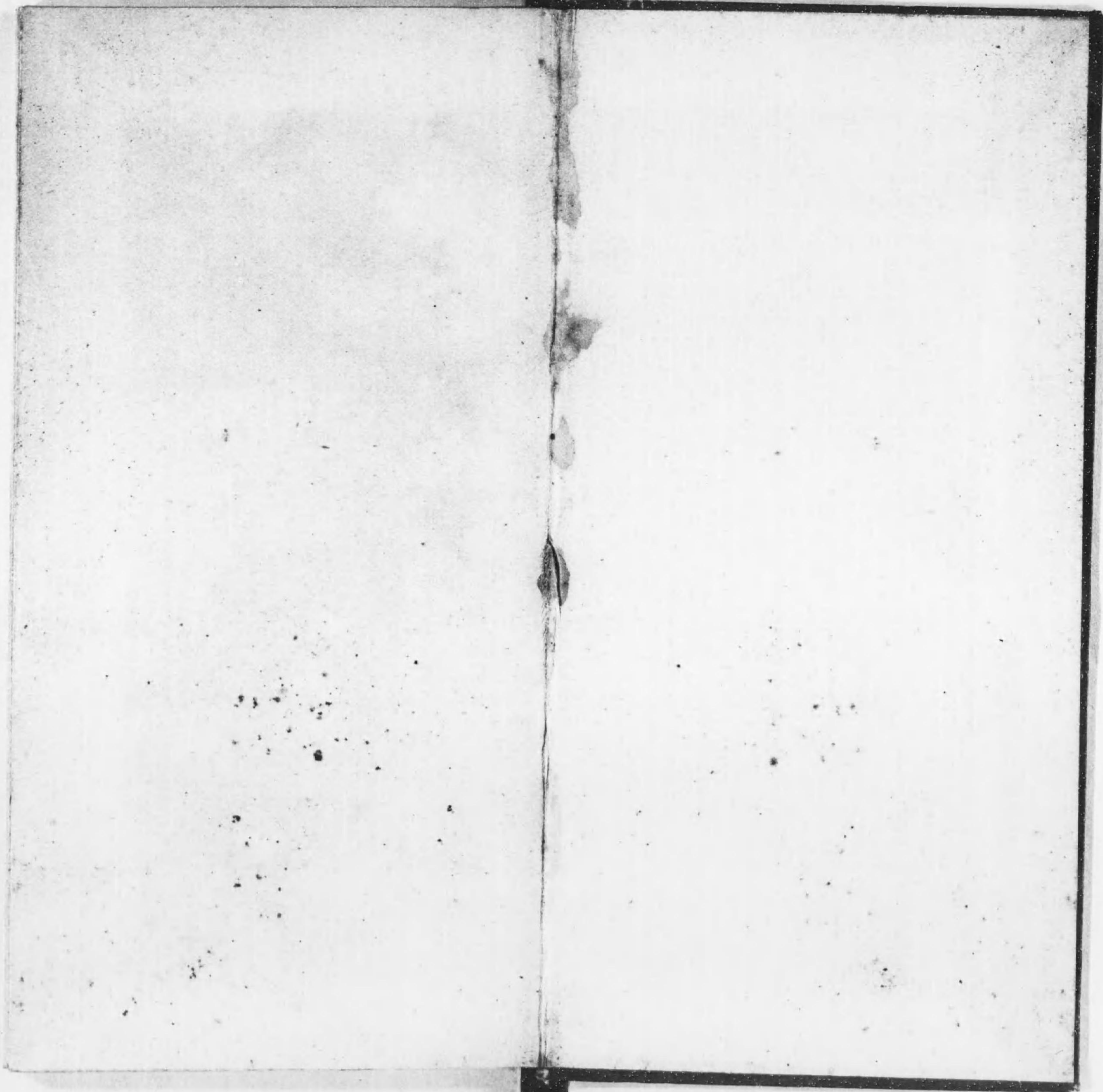
始



おへそ嫁入り

石角春洋着





持109

321



おへその嫁入り



石角春洋著

はしがき

戀に泣き、貧に泣き、境遇に泣いて半生を送つて來た。私が浮世の總てを茶にし、所謂樂觀主義で、ユウモラス的な極めて、軽い筆をこつて居ることは、自分として多少なりと、世の中の實狀に觸れたこゝを自覺せずには居られない、さうした自惚心を以て書いた所の、滑稽——戀愛小説——それは諸兄の御意に叶ふであらうか。甚だ疑はしい次第である。兎に角本書は總て新しい材料を捉へ、徹底的に——奇抜に——滑稽に筆を執つたものである。幸ひに讀者諸兄の御意に叶ふ所が、多少たりともあるこゝ

すれば、小さなユウモリストも大きくなるであらう。

大正辛酉炎暑に苦みつゝ

小さなユウモリスト

目次

東京名物

- 一、夫婦喧嘩「地名づくし」
- 二、吉原廻り「春洋流」

焔の如く

「英子の歌」

- 一、初恋「上」
- 二、家出「中」
- 三、決意「下」

カフェー廻り

- 一、甘黨の歌「滑稽」

(一)

(一五)

(三一)

二、カフェー問答

浮世の習ひ

(三五)

一、甘黨の多い世の中

二、喜多男君の洒落

奇抜な散歩

(四九)

一、エンヤラヤ

二、空らけつだ

三、喧嘩だ！喧嘩だ

面白い嫁探し

(六三)

一、春が来た

二、厄 歳 よ

三、便所の隣家

四、曲つた十の字

消え行く乙女

(八六)

一、心の迷ひ

二、母の心

三、心の焦燥

四、無邪氣な心

五、動揺する心

六、曇る心

色男の選挙

(一〇九)

- 一、蚊蜻蛉の曲藝
- 二、買収！ 買収！

嫁と婿の専賣……

(二三五)

- 一、嫁と婿の安賣り
- 二、嫁と婿の公設市場

だんご理窟……

(二三四)

- 一、負ふた子に教えらる
- 二、正當！ 正當！

嬉しいこと悲しいこと……

(二三七)

- 一、心の高鳴り

- 二、賣られ行く乙女心

皮肉屋の寝言……

(二二)

- 一、おめかしの薄着
- 二、厭な男と時雨の雨
- 三、偽外人の愚さよ
- 四、惚け 廣告

珍しい婿選び……

(二二三)

- 一、美人だね
- 二、口頭辯論

おへその嫁入り

石角春洋著

東京名物

一、夫婦喧嘩

(地名づくし)

「カツコは總て東京の地名」

妻

「水道橋」ミ手を引いて

「榮久町」に別れじミ

「愛宕の山」で契つたに

最早忘れて「女坂」

造つて置いて「白金町」
餘んまり薄情な「男坂」
妾の腹は「立川町」

夫

お前は餘つ程「横網町」

「澁谷町」の顔をして

「焼き餅坂」が過ぎるのだ

妻

イ、エ「見附」で置きました

「本所」に貴下は薄情よ

「七軒町」に通はせて

「簞笥町」まで叩き込み

今更「仲の町」切らうとは

そりや聞えませぬ「傳馬町」

夫

お前は人を「宇田川町」

什麼こゝをば「三田」のだい

妻

「飯倉」貴下が匿しても

「業平町」に極め込んで

「相生橋」に差しかけた

傘の滴が「片町」に

濡れぬ「増上寺」はありません

「本石町」に貴下程

「日本橋」があるものか

「數寄屋橋」も欺されりや

速ぐに女に「堀留」よ

其癖何時でも「鐵砲町」

「本村町」に厭な人

夫

お前のやうに「岩井町」ぢや

「原町」立つこも知らんのか

妻

それぢや貴下は「大曲り」

「吳服橋」でも買つて来て

「妻戀坂」を喜ばせ

「同心町」も働けば

「功運町」が廻り来て

「榮町」もなるこもは

「明石町」ではないかいな

夫

其座こもは「志田町」だ

「肴町」でも買つて来い

「掃除町」でもするが良い

妻

何だ「神田」も「岩本町」

「永代橋」に其の氣なら

「今入町」に縁を切る

夫 何時でも縁は「切り通し」

「永坂町」まで切つてやる

妻 「七軒町」はごうするの

「七軒町」はごうするの

夫 其座ものは「皆川町」

「品川沖」に流れたぞ

妻 それなら妾は「元町」も

貴下のお側に「万年町」も

共に「白金」生えるまで

「臺所町」に働かう

夫 己れもお前に「小石川」

「久堅町」に喧嘩した

「薬王寺町」は止して呉れ

わしはこれから「根津」にでも

「車坂」でも引く故に

「金助町」を貯めて呉れ

妻 妾も貴下を「水天宮」

貴下のお側に「板橋」よ

「本船町」も貴下程

「數寄屋町」は御座いません

假令「黒江町」になればこて

「鍋町」提げて暮します

それで二人は「大平町」

合奏

「大手町」でも振りながら

「一ツ橋」をば渡るなら

「萬歳町」ではないかいな

二、吉原廻り

「春洋流」

そもく身供は

武藏の浪人

粹人通客

粹ミ呼ばれし

あれなる向ふの

吉原の

廓で名高い

京町で

あの妓彼の妓の

妖術に

多くの甘黨が

惱まざる

身供が退じ

呉れんきて

吉原指して

エツサくくさ

聴て門にこ

なりぬれば

妓夫太の野郎が

些いこ出て招く

其座ここには

一向關はず

暖簾をくぐり

這入りて見れば

艶なる美人が

些いこ肩叩く

そこで粹人

些いこ腰抜かす

抜けた其の腰しや

フラくくさ

宙に浮いての

大騒ぎ

かてし加へて

唾涎が

牛の涎か

飴らよこか

二尺三尺

垂れ出して

夢に夢見る

心地して

上がる梯が

トンくくく

上がつて見れば

こは如何に

艶なる美人に

差し向ひ

遇にギウツミ

掴ねられりや

鉛のやうに

溶け出し

そかくさうか

さうであるか

そこでさうく

降服し

懐中物を

投げ出して

本國指して

エツサくくさ

焔の如く

「英子の歌」

一、初戀「上」

一、清い月に照されて

清い心の英子嬢

英子と勇は二人連れ

歩む姿も慎ましく

二、此度の日曜は芝居見に

一緒に行きませう、ね、貴方

妾は芝居が一等好き
行くなら二人で行きませう

三、青春燃ゆる血の頃の

勇は急に吃り聲

胸に大きな波うたせ

赤らむ顔を俯向けて

おへその嫁入り

四、僕も芝居は大好きよ

母様お許しなさるなら

如の如く

假令用事が有ればこそ
僕は何時でも行きますよ

五、さう云ふ聲は曇り勝ち

心の底にも曇りあり

聴て曇りが現れて

心の煩えを訴へる

六、訴へられた英子嬢は

果ない戀を知らずして

無垢な心に戀宿す
宿る其の戀奇しき哉

七、人目を忍ぶ身となりて

燃ゆる戀地の山々や

心の裡の高鳴りを

共に語らふ仲となり

八、楽しい月日を送る中

早くも知れて情なや

母の嚴しい警戒に
監禁同様に監視さる

九、かてして加へて戀人は

規律正しい軍隊に

入營するの身となりて

かこ頼む人もなく

一〇、母の憤怒と戦ひつ

多くの人を敵にして

悲しい月日を送る中
早くも一年経過する

二、家 出 「中」

一、英子は烈しく昂奮し

堰き來く涙堰き敢ず

熱い涙に嗚咽つゝ

語る言葉も苦しげに

二、假令離籍をされることも

く 如 の 焔

世間の口にかゝることも

妾の思ひは徹します

屹度徹して見せます

三、勇は急に顔を上げ

英子の肩に手をかけて

迫る動悸を抑へつゝ

聲を烈しく顫はせて

四、あなたの覺悟がそれなれば

一時も早く家出して
共に楽しく生活さうよ
それが二人の幸福よ

五、英子は急に啜り上げ
潜んだ眸を彼に向け
烈しく身體を顛はせて
勇の腕にこり縋り

おへその嫁人

六、時代錯誤の母上や

く 如 の 焔

父の遺言を受け繼いだ
頑固な人に辛められ
毎日毎夜泣きくらす

七、云へば勇は傷はりて
英子の顔を覗き込み
臉に露を宿しつゝ
返へす言葉も優しげに

八、それも僕ゆへ僕の爲め

僕は一生忘れない
赦してお呉れ英子さん
僕は謝する此の通り

九、戀する男に傷はられ

優しき言葉の數々を

聞いた英子の心の裡は
夢か現か幻か

一〇、妾は家へ歸りません

貴下ご二人で居るならば
如何なる苦勞も致します
ごんな浮き目も厭ひません

三、決意

「下」

一、花咲く上野の一隅に

世帯に花を咲かせつゝ

楽しい月日を送る中

勇の野心にあやつられ

二、無理な求めを母上に

願へご迫れご母上は

世にも良妻賢母として

不義の娘に情はかけぬ

三、頑固一徹云ひ徹す

母の心の切なさは

子持つ母の慈悲として

けにも哀れな物語り

おへその嫁入り

く 如 の 娼

四、心の裡では泣き叫ぶ

されども表に怒りてや

お前のやうな不義の娘は

持った覚えは更にない

五、早く歸れご叱咤する

浮世の義理がないならば

可愛の娘これ英子

お前の望みを入れてやる

六、心の底で叫びつゝ

早く歸れよ又叱る

あゝ遣る瀬なき母心

あゝ傷はしき母心

七、されども英子は歸られぬ

たゞに歸れば戀人に

厭な顔をば見せつけられ

厭な言葉を聞かされる

八、さうしたことがマザークミ

胸に浮かんで来る度毎に

遂には心が狂つてや

無謀に母を強迫す

九、暴れ暴れた其の結果

臆ては狂つて死を思ふ

消えて果なく其の苦痛

消え行、哀れな英子嬢

一〇、噫！ 恐ろしの初戀よ

噫！ 恐ろしの不義の果

慎むべきは初戀よ

母の躰もさてはまた

カフエー廻り

一、甘黨の歌

「滑稽」

わたしや女に、カツレツよ、

カフエー女に、カツレツよ、

これぞ知つてか、悟りてか、

肩の邊りを、したかゝに、

雪かき疑ふ、白の手で、

ボカリと遣つて、ニツゴリミ、

微笑む笑顔に、見られてや、

掛けるお腰が、フラフラミ、
 漸く掛けて、シミジミミ、
 見られる裡に、其の中に、
 精魂忽ち、飛び去りて、
 「こんど来るさきや、三越で」
 「金の帶止め、買つて來か」
 「それが厭なら、プラチナか」
 「何んでも買つて、あげますこ」
 媚びてポイの、歡心を、
 賣れども買へども、何んのその、

聽て蹴飛ばし喰はされて
 好きなお方の、側許り、
 噫！ 夢の世や、夢の世や、
 思へば浮世が、厭になる、

ニ、カフェー問答

問 女に渴えて居なくとも、カツレツくこ云ふはこれ如何に、
 答 若いポイが居ても、「バー」婆ア「こ云ふが如し。
 問 晩に飲んでも、アサヒビールはこれ如何に、
 答 「否」否「こ云へぎ、「ソース」ソース「こ云ふが如し。

問 味方であつても、「テキ」敵」云ふはこれ如何に、

答 厭」云つても、「スキ」好き」云ふが如し。

問 虐待しても、愛す「アイス」云ふはこれ如何に

答 不景氣でも、景氣「ケーキ」云ふが如し。

浮世の習ひ

一、甘黨の多い世の中

「冷酒」親の意見が後で利く」ことを知らない浮世に——さては喜多男も其の一人か、甘黨の本氣——本質を發揮して、手當り放題廻る云ふ、至つて奇抜な洒落者——自ら洒落者」自稱して、變てこちんな洒落を大平に吹聴する云ふ、滑稽さ、奇抜さ、確におなかの洗濯——一番洗濯の決心で、讀み給へ、聞き給へ、拂ひ給へ、清め給へ!

兎に角、今日の浮世は、かうした甘黨の多い、世の中であるが、却々世ち辛い浮世で、義理も、人情もなく、甘黨先生の鼻毛を見事よませる爲めに、何れの場所——何

れの店を問はず、東西南北——四角八面、至る所に、妙齡の美人を飾りつけ、「來被い」の合奏で、見事懐中物を巻上げる、恐ろしい世の中、

それも其の筈だ。艶なる美人の前には、如何に堅いく石部君でも、ケチく山の客君でも、ダラリ垂らす二本棒、高いも、安いも、何のその——何んこもかこも、云は神さんか——厭な眼付諸共に、要らぬ物まで、買ひ込んで、お負に釣り銭要らぬこカみ込み、すました顔は、チン面か——エンマの兄貴か大佛か、打つても、叩いても、音のしない、ヤカン頭の出来そこないか、さては汝は、強制通用の、有り難味を解せざるか、馬鹿か、阿呆か、腰拔か、俯抜か、間抜か、空惚けか、罵り罵倒されたさて、彼の娘の爲なら、厭やせぬ、わしや何處までも關やせぬ、借金質に置いたさて、親に勘當されたさて、彼の娘の店から——かの娘の手から——買はずばな

るめい、ズンベラく……

「オイ君、此の向ふの美人知つてるか」

「ウン！ 煙草屋の娘だらう」

「ウン、さうよ、知つてるのか」

「馬鹿！ 彼の娘を知らいで生きて居られるか」

「ぢや、君は知つてるんだね」

「エヘン！ はばかりながら、ちやんくながら日に二三度は逢つてるさ、君こ些つこ違つてるからね」

「さうかね、併しそりや嘘だらう、彼の女が却々君なんかの手に入る理由がないからね」

「馬鹿野郎！」

手に入らなくとも、逢ふだけは逢へるぢやないか」

「そりや、逢へるさ顔見る位なら、誰だつて見られら」

「所が吾が輩なんか、失禮だが、見るだけでないのだ、彼の女の美しい、優しい手か

ら物を貰ふのだ、却々隅に置けないだらう」

「馬鹿、自惚れるな、彼の小町娘が君の番臺面のひよつこ面に惚れて堪るものか」

惚れてるか、惚れて居ないか、知らないが物を貰ふだけは確だよ」

「それぢや君は、彼の女の門に立つて、「右や左の旦那様」でも遣るのか」

「馬鹿野郎！ 其塵真似が出来るか」

「それぢや、一體何を貰ふのだ」

「知れたことだ、煙草屋へ行けば煙草を買ふに定まつてら」

「だけき、君は煙草が嫌ひでないか」

「ウッ、嫌いさ、さうしても喫めないので困つてるのさ」

「それにさうして煙草なんか買ふんだ」

「慈善事業を遣るのさ」

「慈善だッ——」

「さうさ、さうしても、買ったものは捨てる理由に行かんから、買った煙草を人に遣るのさ」

「ワハア—甘黨も茲に至つちや、言語に堪えたねえ——」

かうした甘黨が、近頃は却々流行して來た。

で、喜多男君も、一つこれ等と競争して見やうと思つたのだつた。

二、喜多男君の洒落

世の中が進歩すれば、進歩する程、甘黨先生が多くなる。

で、子供を製造する場合には、須らく美人を製造すべしだ。野郎を産むやうな鼻アであれば、遠慮することははない、さしく離縁すべしだ。屁茶でも、番茶でも、美人を産む鼻アなら、鼻ア大明神と拜し給へ、奉り給へ、鼻アのここなら、ソカく云ひ給へ、服従し給へ、サイノローデーを極め込み給へ。

云ふのは他では御座らぬ、世の中がだんく世ち辛くなればなる程、甘黨統御法が必要になるのだ。鼻毛を抜くここが肝要なんだ。美人の娘を一人持つて居れば、パンには窮しない、店に飾つて置けば、如何に淋しい、高いくヒマラヤ山のやうに高

い物でも何んのこころはない、羽が生えて飛び歩く。

甘黨の感情を惱殺するだけの、美人さへ製造して置けば、厭でも、否でも金満家になれる。

それは嘘でも、何でもない。其の證據には、本問の主人公喜多男君の如き、甘黨が御座るでないか、先生も随分甘黨と見え、淺草の万年町から、五錢の肴を買ひに、牛込神樂坂上まで、親から貰つた自動車か、テクマピールか、テクついて、汗びつしよりに駆け出して、人力車に打ち當り、交番巡査に叱られて、自動車乗りには、蹴飛ばされ、自働くるまに、足しかれ、命からがら駆け込んで、五錢の魚を買ふ爲めか、娘の面が見たいのか、お百度するので、怒られてさうさう魚も買へずして、指を嚙へて万年町へ、さぼく歸る、隣さは、何んも惨めで御座らぬか。

それでも、本人、大得意！これにこりすの童方坊主——又しても出かける馬鹿野郎！

それも其咎だ。大正小町娘さうたはれた。當世流行の圓ほちやで、眸は甘黨を殺すよな、凜々しい眸で、鈴のよに、二皮眼元が、バツチリミ、開けた其眼は、千金の價に優る高價品。色が白けりや、七難隠す。白い上にもまだく、白い。鼻が高けりや甘黨が参る——参る咎だよ、千圓鼻よ。口齒が白くば、愛嬌を助く、ニツコリ笑へば、甘黨が溶ける。溶けた甘黨は、金を蒔く、兎角女は、髪の上。黒くて、光つて、まだその上に、多くの髪が、ツヤ／＼と、曲けた頭が、高島田。歳は二八か、二九からず。自然の花か、名前まで、花子に附けたは、天性か、さては彼女の女は、神の娘か辨天様の後継ぎか、小野の小町か、てるての姫か——さては大正の、ビューティーか

一があつても、二のない娘。

此塵美人を店の前に、飾つて置くのだから、堪つたものではない。彼の娘——かの娘を知らない奴は、犬に噛まれて、善光寺へ詣れと言ふ大騒ぎ、喜多男君が、淺草萬年町から、命を賭に——五錢の白銅が焼けつく程に、堅く握つて、駈け出すも、亦道理なる哉！

彼は性もこりもなく、男の一念岩をも、徹すの勢ひで、命を投げて駈け出したのだつた。

行きたい道に坂はない、二里程の道をへト／＼になつて、駈けたので、彼はさうく彼の女の店前に着いた。

が、生憎其日に限り、花子嬢が飾られて居なかつた。彼の落膽は一通りでない身

も世もあらぬ思ひをした。けれども、なんとも致しやうがない。で彼は一圖に天を恨んだ。「天さう様聞えませぬ」ミ、深雪の二代目を遣つて見たが、さてく却々出て来ない。

彼は益々焦々として、「用もない門、二度三度」ミ駈け廻つた。が、さうしても拜顔の榮を得ない。彼の心は愈焦ら立つた。立つても居ても、居られなくなつた。彼は遂に常識を失つた。無我夢中になつた。

そのハズミ彼は思はず、彼女の家に駈込んだ。

「來被い！」ミ、小僧の威勢の好い聲に、喜多男先生、ビクミした。が、今更逃げ出る理由にも行かなくなつた。で、彼は昵々して居たが、思ひ切つて、

「な、何か下さい」ミ、吃り聲で云つた。が、最早店には、賣れ残りの鯛が一疋しか

なかつ。

「左様で御座いますな、もう皆んな賣れまして、この鯛が一疋あるだけです」ミ、小僧は一疋の鯛を指して云つた。

喜多男君大分躊躇したやうに、

「鯛はたいですが——其何ですよ、たいの上に今一字つくんですよ」ミ、頭を掻きながら云ふのであつた。

此處どこでも云つて居る裡に——もしか花子嬢が出て来やしないだらうかと思ひながら、奥の方許り注意して居た。

「何ですか、鯛の上に一字つく肴ですか」ミ、小僧は如何にも、不審さうな眼附きをして訊いた。

「さうなんです、たいの上に一字つくんです」喜多男君は振向きもせず、矢つ張り奥の方許り見詰めながら答へた。

「さうです、鯛の上に字のつく肴云へば——天鯛ですか——それとも黒鯛ですか」小僧はさう云つて、彼の肩を衝いた。

彼は漸く振向いて、

「さうぢや、ありません、天鯛でも、黒鯛でも假名にしますこ二字になりますからね違ひますよ」こ、拍子抜けのしたやうな口調で云つた。

「ぢや、何ですか」こ、小僧益々不思議さうな顔付きで訊いた。

「見たい「ミ鯛」ですよ」こ、喜多男君は小僧を思つて、洒落の決心で云つたが、小僧は早くもそれを知つて、

「アハ……貴方も甘黨の口だね、アハ、可愛さうに今日はお留守ですよ」こ、小僧が堪へられないやうに、哄笑しながら、云つたこまだつた。

花を欺く花子嬢が、何處の何くの若黨か、まだ二十八九の色白の、男らしい男の手を携へて。

「ね 貴郎、遊んで行被いな好いでせう。今日はお父さんも、お母さんも居被らないのよ、ですから些つこお遣入りなさいな」こ、滴る程の愛嬌を出して、媚びるやうに甘へるやうに、云つて男の手を引いて居るのであつた。

それを見た喜多男君、流石に二の句が出なかつた。色も、熱も、一時に冷めて、冷やくこ、厭な寒氣がヒシヒシ、水でもかけられたやうに身體全體に冷氣を感じられるのだつた。

同時に黒い墨のやうな、嫉妬がムラ／＼と潮のやうに、胸に迫つて来たので、握つて居た。大事の／＼五錢の白銅を、店前に投げ付けて、後をも見ずにすん／＼と、逃けるが如く、我本陣へは戻つたのであつた。

奇抜な散歩

一、エンヤラヤ

人には人癖と云ふが、全く奇抜な奴もゐるもんで。殊に筋右衛門君が来た日には、其最も甚だしい奴である。

其奇抜な先生が、又馬鹿に散歩が好きで、暇さへあれば、ぶらりくらしで、這ひ廻る／＼云ふ至つて始末の悪い先生。其先生が或る日淺草方面へ出掛たのであつた。

丁度先生が、新谷町から、千束町に差かゝらうとしたときだつた。交番所の移轉が見えて。四角な――否、少し長方形になつた。交番所をトロか何かのやうに。木の丸太に乗せ五六人で、「エンヤラヤのヤントコセ」で以て、十間以上も滑らして行くのだつ

た。

それに見た筋右衛門君。

「こりや、面白い！」と、獨語を云ひながら、さも珍らしさうに——面白さうに恰でアイヌ人が東京見物に、出かけたやうな恰好して、暫くの間は、それに見られて居るのだつた。

が、暫くするに、彼は精魂を失つた、「痴呆か何かのやうに、バラ／＼と駈寄つて、

「エンヤラヤのヤントコセー」

「エンヤラヤのヤントコセー」で以て人が頼みもしないに、交番の後から、力一杯汗だら／＼、ダラツクだら／＼、ダラ／＼／＼で、一生懸命に押したから、堪まらな直に交番は丸太をハツレ・ガタンぎたんの物音共に、横に倒れて了つた。

「さあ！ 大變ッ！」と、筋右衛門さん、命限り、根限り我家を差して、エツサ／＼エツササで以て、逃げ出したが、其瞬間、さうだ、何時の間にか、お巡りさんの大きな手が、ギユツ／＼筋右衛門さんの頸筋に、引掛つて居た。

「ごうか、勘忍して下さい！ ごうも濟みません！」と、先生泣き聲を出して、首を竦めたが、ごうして、それをお巡さんが、放すものか、益々強く、愈堅く、骨も筋も碎けし許り、力任せにギユツ！ と握つて、

「ヤイ！ 此の野郎！ 悪戯しやがつて承知が出来ぬ！」と、お巡さんは先生を叱咤しながら、引き立てたのであつた。

で、筋右衛門さんは、ガタ／＼ブル／＼と、中風か何かのやうに、大きく顔えながら、

「全く私が悪かつたので御座いますから、ごうか御寛大な御處置に預かりたう御座います！」と、ベソ／＼泣きながら、詫を云つたが、却々お巡さんは許さなかつた。

「一體！ 貴様は何ぞ思つて、交番なんかに手を掛たのだ！」と、比較的優しく訊いたので、筋右衛門さん、些つこ一息つきながら、

「實は其何で御座います——餘り面白さうでしたから、つい其何で御座います、フラ／＼其何で御座います、常識を失ひまして、其何で御座います」と、如何にも恐縮して「其何で御座います」を連發して頭許りペコ／＼下けながら、詫たのだつた。

「馬鹿な／＼を云ふな！ 交番の移轉が何が面白いのだ！」

「でも、何／＼面白／＼思ひましたので……いへ其……押して見たくになりましたので御座いますへい／＼」

「貴様は餘程氣が狂つて居るな」

「ごう致しまして、立派な頭の所有者で御座います」

「馬鹿野郎！」と、お巡りさんも、餘りの／＼に苦笑した。が、筋右衛門は眞面目な面して

「これでも、平素は却々立派な人間で御座いますよ、だけ／＼、彼の妓に出逢つたり、面白い／＼を見たり、聞いたりしますと、ついフラ／＼と、魂が宇宙天外に飛びまして、へい／＼其何で御座います、つい常識はづれな／＼を致しますので、何／＼も申譯が御座いません」と、平氣の平左衛門を極め込むで云ふのだつた。

で、流石にお巡りさんも、呆れ果て二の句が、繼げないやうに、苦笑して横を向いたが、聴て思ひ出したやうに、

「貴様のやうな人間を相手にしたつて仕方がない、早く歸れ！」と叱咤するやうに、力強く云つた。で、彼はさもく、氣の毒さうに、頭を掻きながら、止せば良いのに、「でも、お氣の毒ですから、起しませう」さう云ひく、倒れて居る交番所に、手をかけたのでお巡りさんは嚇こなつて、

「馬鹿！ 貴様のやうな筋右衛門が、何になる！ 歸れ云へば早く歸れ、此の馬鹿野郎！」と、大喝一聲諸共、ビシヤリ横面を遣つた。で、筋右衛門さん、

「ア痛たツ！」と、叫びながら頭を抱えて二歩三歩——たちく退かつた。

「早く歸れツ！」と、睨めつけられて、ヒルに鹽云つたやうな面付きして、

「へいへいへい」と、幾度こもなしに、安つほく頭許り下けて居た。

何云はれても、彼には反抗的の言葉は出なかつた。

間もなく彼は、鎗が敵の眼を眩ます爲めに、黒い汁を出して逃ける時のやうに、スゴく小さくなつて、逃げ出したのだつた。

二、空らけつた

交番所の移轉で、失敗した筋右衛門君は元氣なくこぼく、千束町の通りを何の的もなく、歩いて居るのだつた。

所が突然彼れの眼に強く映じたものがあつた。さうだ、彼の眼を泥棒かなんかのやうに横向きにしたのだつた。車に打つつかるのも、自轉車に衝突するのも、馬に突き當るのも、何もかも忘れて、藪隈みのそのやうに、始終横許り向いて居るのであつた。

それも無理からぬことだ。彼の横には天女のやうな——えも云はれない、ビフテキが御座るのであつた。さうだ、何處かの御令嬢でもあるかのやうに、慎ましやかにシナクシ姿勢能く歩いて御座るのだつた。

で、彼は先刻交番で、自白したやうに、直に精魂を失つて、涎許りダラクク、ダラクク、一尺も二尺も無限に垂れながら、彼女の後を追究して行くのだつた。

そして彼は心の裡で、

「随分美人だな、彼のしこやかなこゝ、彼の慎ましやかなこゝ、多分大家の御令嬢だらうな」こゝ、人知れず叫んだ。

丁度其時だつた。筋右衛門さんの方へ彼女の鋭い眸が向くと同時に、妙な愁波が烈

しい波を打つて、流れて来た。

で、筋右衛門さんは、もう眼が見えぬ、腰が抜けたと許りに喜んだ。全く腰が抜たのかも知れない。フラククフラついて、恰で風に吹かれて居る、風船玉か何かのやうに、他愛もなくフラつき出した。が、彼は無理にそれを抑へながら、危なかしい足を運ばせて、彼女の行く方へ歩いて行つた。

「彼女はごんな立派な家へ這入るであらうか」其處こゝを考へながら、殆ど無我夢中で後をつけた。

聴て彼女は細い横町へ這入つた。で、彼も圖々しく同じ横町へ這入つた。女は百軒長屋の或る家へ身體を入れるこゝ、急に振向いて、

「ね、お這入りなさいよ」こゝ、突然に聲をかけた。それと同時にヨウドホルムの強い

馱な臭ひが鼻の穴を突き抜くやうに、流れて来た。

で、流石の筋右衛門さんも、これには閉口後をも見ずに、エツサくで、ごんくくミ駈出したのだつた。

三、喧嘩だ！喧嘩だ！

ヨウドホルムに驚かされた筋右衛門君は、歩きながら色々なことを考へた。

「人間は見かけによらぬものだ、華族の御令嬢かなんかのやうに、着飾つて蟲も殺さぬやうな顔附きして居やがつても、何だ！ 彼女は……」ミ、思はず叫んだ。

さう叫びながら、何気なく頭を擡げて見るミ、向ふの方に澤山な人が、ガヤくくミ居るのだつた。

「何だ！ 喧嘩か！」ミ、筋右衛門君は獨語を云ひながら、現場に駈つけた。するミ如何にも、筋右衛門君の想像した通り、職人體の男ミ、商人らしい男ミの口論だつた。

「馬鹿野郎！ 貴様の方から打ち當りやがつて文句を吐す奴があるか！ 此の間拔奴！」ミ、職人體の男は今にも、腕力に訴へやうミして居たが、相手は案外にも冷静に、

「其塵なここ云やはつたても、あきまへん、此の通り見て居やはるんぞすもの、皆はんが證人ぞすさかへな、嘘云やはつても、そりやあきまへん」ミ、生温い關西辯で、相對して居るのだつた。

「何だつて、其塵證人になる奴があるかい此の腑拔奴！ 貴公の方から突き當りやがつて、何を吐してやがるんだい！ 畜生ッ！」

「其座(そのま)はおまへん、貴下(あなた)はんから、先(ま)きに突(つ)つかはつたんぞすがな！」
 かうした氣(き)のない喧嘩(けんか)を見て居(ゐ)た、筋右衛門君(すぢゑもんくん)、何(なん)ごかして此(この)喧嘩(けんか)に花(はな)を咲(さ)かして
 遣(や)りたいと、思(おも)つたのであらう。つかくゝ前に進(すす)み出(で)て、自(じ)分(ぶん)が持(も)つて居(ゐ)た大(おほ)きな
 ステツキを、弱(よわ)さうな商(あき)人に渡(わた)たさうとしたが、商(あき)人は不(い)審(さ)さうな顔(かほ)して、

「こりや、何(なん)ごすか」ミ、眉(まゆ)を聳(しん)めて訊(き)いたので、筋右衛門君(すぢゑもんくん)は、如(い)かにも得(とく)意(い)さ
 うに、

「それで喧嘩(けんか)をするのだ！」ミ、力(ちから)強(つよ)く云(い)つたが、相(あ)手(て)は案(あん)外(がい)にも、

「ご、ごう致(いた)しまして、そないなこごが出来(でき)ますかい、アたいは喧嘩(けんか)なんか嫌(きら)ひぞ
 すさかい、お返(かへ)しします」ミ云(い)つてステツキを筋右衛門君(すぢゑもんくん)さんに、返(かへ)さうとした。

其時(そのとき)喧嘩(けんか)が賣(う)たくて、ムズくして居(ゐ)た、例(れい)の職(しやく)人(にん)體(たい)の男(おとこ)が、待(ま)つてましたと許(ゆる)り

に、ヌツミ現(あら)れた。

「何(なん)だつて！ この野郎(やろう)！ 喧嘩(けんか)をしろだ！ 生意氣(なまいき)な、筋右衛門君(すぢゑもんくん)の癖(くせ)に馬鹿(ばか)野郎(やろう)
 ツ！」ミ、叫(こゑ)んだかと思(おも)つたら、筋右衛門君(すぢゑもんくん)の出張(でせ)つて居(ゐ)る頬骨(ほほほね)の所(ところ)を力(ちから)に任(まか)せに、
 ポカリと遣(や)つたから堪(た)まらない。

「キヤツ！」ミ、叫(こゑ)び諸共(もろども)憐(あは)れや、無(む)残(ざん)や其儘(そのま)にござたんぞ倒(たふ)れて了(しま)つた。それで勘(かん)忍(にん)
 して遣(や)れば、良(よ)いに勢(いきほ)ひに乗(の)じた職(しやく)人(にん)體(たい)の男(おとこ)は「此(この)野郎(やろう)！ 口程(くちほど)にもない生(い)氣(き)地(ぢ)な
 し奴(め)！」ミ、如(い)かにも憎(にく)らしさうに、叫(こゑ)びながら此(この)度(ど)は力(ちから)任(まか)せ蹴(け)飛(と)ばしたから、堪(た)ま
 した理由(わけ)でない。筋右衛門君(すぢゑもんくん)の頭(かぶ)から、ザクくゝ筋右衛門君(すぢゑもんくん)に、相(あ)當(あた)した血(ち)潮(しほ)が流(なが)れ出(だ)
 したのであつた。

其中(そのうち)に相(あ)手(て)の職(しやく)人(にん)は、雲(くも)を霞(かすみ)にこ何(い)れにか、逃(に)げ去(さ)つたのである。

で、筋右衛門君は、漸く見物の人に助けられ、起き上つたが、恰で戦場にでも行つたやうな、面附きして、キト／＼四邊りを見詰めて居た。
 何と云ふ不憫な筋右衛門さんであらう。

面白い嫁探し

一、春が来た

春が来た。野にも山にも春が来た。筋右衛門さんにも春が来た。デブ右衛門さんにも春が来た。骨右衛門さんにも春が来た。

何れの時、何れの場所を問はず、春が来れば花が咲く、咲けば散る。それは決して不思議なところでもなければ、又珍らしいところでもない、自然だ。自然の勢ひだ。

所が骨右衛門さんには、春が来ても花が咲かぬ。さうやら咲かずに散りさうだ。それも其筈だ。當年取つて三十五歳、而もヒヨロ／＼の骨右衛門さん、蚊蜻蛉の曲藝見たいな筋右衛門さん、今少し痩せやうと思つても、骨が邪魔になつて痩せられない。

さうだ、骨が瘦せれば兎に角も、一片の肉を持たぬ、骨右衛門先生には最早瘦せる餘地がない、何れにしても、春が来てから、永い間喉かすに恍つこ、辛棒して居たが、もうさうしても我慢が出来なくなつた。否、喉かすに散るこころが、如何にも残念で堪まらない。何こかして一度でも、假令一日でも、花が喉かせたい。理が非でも喉かせたくなつた。

友達なごが三人も四人も、乃至七人も八人も、多くは十人も十一人も、子供を製造して居るのを見るこ、立つても坐つても居られない程、恐ろしい心の焦燥を感じ初めた。

「噫！ 嫁が欲しい、噫！ 嫁が欲しい」こ、嘆息せずには居られなくなつた。

昔時から「窮すれば通ず」こか云つて居るが全くだ。骨右衛門さん煩悶の結果色々な

こころを考へた。

それは外でもない、至極蟲の好い考へをしたのであつた。

「嫁がないこ云ふのは嘘だ。探さないからないのだ。抑も吾輩たるや、男振りこ云ひ人格こ云ひ、才能こ云ひ、學識こ云ひ、血統と云ひ、性質こ云ひ、何一つこして缺點のない男である、それに一人も嫁に来てがないこ云ふ、理窟がない、それは我輩たる者を多くの婦女が知らないからだ。さうだ、東京には四百萬の人が居るのだ。假に其半數を女こ見れば、二百萬人からの女性が居る筈だ。そして其女性の十分の一は、必ず嫁に行きたがつて居るのだ。即ち二十萬人の妙齡の女性が、嫁口を探して居る理窟だ」

かう考へた時は、骨右衛門さん思はず知らずニツコリ微笑むだのだつた。

「ウン、さうだ二十萬人の内には我輩のやうな、何一つとして缺點のない、好男子を好く娘があるだらう。二十萬人の女性が總て我輩を嫌ふ筈がない。だから一人々々に交渉して見やう。さうだく」
 骨右衛門先生俄に元氣づいて立ち上がった。

が、能く考へて居るに、この廣い東京市中を一々戸別訪問して歩く理由にも行かぬ、其塵迂遠なことをして居た日には、それこそ咲かずに散らねばならぬ、それは何よりも悲しい、苦しいことである。だから今少し手取り早い、巧案はなからうか考へ出したのであつた。

所が流石に骨右衛門先生だけあつて、天下一品の考へを編み出した。それは鐘こ太鼓で東京市中を毎日く探し廻ることであつた。

さうした立派な考へを編み出すと同時に、「善は急げ」
 許りに早速鐘こ太鼓を買

ひ求め、毎日「ちんく〜さんく〜嫁はないかく〜」で探し歩くのだつた。

二、厄 年 よ

骨右衛門先生、鐘こ太鼓の嫁探しを考へ出してから云ふものは、寢食を忘れて毎日降つても照つても、お嫁のこゝなりやこちや厭やせぬ關やせぬの筆法で、鉛屋か何かのやうな格好して、「ちんさんく〜」を遣らかして歩き廻つた。

が、扱却々骨右衛門さんを見込んで来る同情的の女性は一人もない。で、骨右衛門さん非常に落膽した。が、これを止めた日には、咲かずに散らねばならぬ、それを考へるに、何ごしても止める理由には行かぬ。理が非でも遣らねばならぬ「犬も廻れば棒に當るの諺もある。

さう思ひながら、「嫁はないかくで、ちんく〜んく〜」を遣つて居たのだつた。「天道人を殺さず」こやら、或る日のここ〜それは天氣の好い、心持の好い日だつた。突然に一人の候補者が現れた。で、先生もう魂は宇宙天外に飛去り、相手が何物であるか、そんな格好の女性がか、解らぬ程眼尻か皆悉下つて、眼が眩んで「もう眼が見えぬ、耳が聞えぬ」こ、云ひたい程になつて了つた。

「ヤア！ 難有いく〜！ これはく〜馬鹿にデブさんだな、我輩が何日でも太つた女が好きだこ云つて居るから、多分出雲の神様が氣を利かせて太つた女を候補に立て、下すつたんだ難有いく〜」

さう思ひながら、馬鹿が笑ふそのやうにニヤリ〜こ笑ひながら、而も極り悪さうに、

「アノ、貴女が候補者ですか」こ、恐る〜聞いたのだつた。で、デブさん俄に姿勢を正し、盛んに襟を掻き寄せながら、妙な一種獨特な嬌態をして、

「ハイ、左様で御座います、妾のやうなデブ子でも宜しう御座いましたらごうか！」

こ、他所行きの言葉を出して、羞かしさうに口籠つた。さうなるこ女にカツレツの骨右衛門さん「もう足が立たぬ、腰が抜た」こ云はん許りの表情で、涎許りダラツク、ダラ〜させながら、

「こごう致しまして、わ〜私は太つた方が大好きなんですよ、兎角女は肉體美がなくちや、駄目ですよ、エ〜く〜眞實ですよ」こ、すつかり甘黨を發揮して了つた。で、デブ子は益々極り悪さうに、身體を左右に軟かく振ながら、

「あの、貴方、眞實ですか、眞實に可愛がつて下さるの」こ、甘えるやうに云つて、

70 妙な眼付きで睨みつけた。

「眞實ですとも、嘘なんか云ふもんですか」

骨右衛門さん、何事も忘れたやうに云つたので、デブさん愈喜んで骨右衛門さんの側へ駆寄り、

「わゝ妾、うゝ嬉しいわよ」こ、吃りながら、骨右衛門さんの手を執つた。

「わゝ私も、うゝ嬉しい……」こ、骨右衛門さん我を忘れて叫びながら、堅く握り替へした。が、聴て気がついて見るこ、彼女は五尺八寸の骨右衛門さんの腰の邊りまでしかない、恰で一寸法師かなんかのやうに見えたので、流石に骨右衛門さんも握つて居た手を放した。同時に口を利いた。

「あの貴女の身長は幾何ありますか」こ、骨右衛門さん夢から覺めたやうな、氣持ち

り入嫁のそへお

になつて聞いた。

「身長こ仰有るのは背の高さですか」こ、彼女は些つこ躊躇したやうに、眼を丸くして聞いたのである。

「さうです、高さです」こ、骨右衛門さんは肯つきながら答へた。

「あの、少し低いのよ、三尺二寸しかないの」

「道理で低いと思ひましたよ、少し所ぢやない、大分低いです、二尺近く低いですなこ、骨右衛門さんが大いに落膽したやうに云ふこ、彼女は辯解でもするやうに、

「でも、お尻の廻りが澤山ありますから、平均するこ好い加減になりますわ」こ、云ふのであつた。

「さうですか、ぢやお尻の廻りは一體幾ら程位ありますか」

し採嫁の門障右骨

71

「さうですね、餘り澤山云ふ程では有りませんが、五尺八寸以上御座いますの」云、彼女は如何にも得意さうに云つた。

「たゞ大變です、あゝ反對です——」云、骨右衛門さんは驚いて、吃り出した。が、間もなく思ひ出したやうに、

「そしてお年は幾歳ですか」云、骨右衛門さん少し腹立しさうに聞いた。が、女は平氣の平左で、

「あの、今年厄年なのよ」云、骨右衛門さんに愁波を送りながら云つた。

「厄年ご仰有るご何ですか十九ですか」云、先生は首を傾けながら訊いた。

「イ、エ、違つてよ——

「それぢや、二十五ですか」

「二十五は男の厄年ぢや有りませんか」

「では三十三ですか」云、骨右衛門さん眉の間に深い皺を好せながら、不快さうに云つた。けれども、女は決して躊躇しなかつた。

「違つてよ、四十二の厄年なのよ」

「ワハア！ たゞ助けて呉れ！ こ腰が抜た！」云、骨右衛門さん餘りのここに腰を抜かして、命限り叫んだのであつた。

女はさち／＼腹立しさうに、

「人を馬鹿にして居るのね、此骨右衛門さんは、人の年を聞いて腰を抜かすなんて、馬鹿々々しい」云、云ひ／＼何れにか去つて了つた。

後に残つた骨右衛門さん、胸の邊りを幾度こもなく撫でつゝ、

「イヤ、大失敗！ 敗北！ 敗北！ 意！ 意！ 此世が厭になつた。事もあらうに厄年には何事だ、意！ 悲観々々」ミ、獨りで叫んで呆然と考へ込んだのであつた。

三、便所の隣家

第一回の失敗で骨右衛門さん、悉皆落膽して了つた。

「噫！ もう厭だ！ 厭だ！ 鐘こ太鼓の嫁探しも厭になつた。此馬鹿なこころをして居る人に笑はれて了ふ。早く廢めやう。だがこれを廢めた日には何日になつても花が咲く時期がない、それを考へるこ止るめ理由にも行かない。ハテさて困つたな、何の因果で此馬鹿なこころをしなくちやならないんだらう、噫！ 厭だ！ 厭だ！」

ミ、獨語を云ひながらも、矢つ張り「ちんくさんく」を遣つて居たのであつた。

所が世の中には随分物好きもあると見えて——否、嫁に行くこころが出来ない女性が
あると見えて、又一人の候補者があつた。

で、骨右衛門さん、又しても大喜び、

「難有いく、又一人遣つて来たぞ」ミ、心の裡で小踊りしながら、女の方へ眼を展じた。

「此度は前のやうに眼を眩ませないやうに、能く見なくちや不可んで、さうでないこ前のやうな失敗をするから」

さう思ひながらも、ムラ／＼と来る本能の爲め、矢つ張り「もう眼が見えぬ」の筆法で、俄に目がかすんで何うしても能く見るこころが出来なかつた。能く見てやらうと努

力すれば努力する程、益八十婆さんか何かのやうに、薄暗くなるのであつた。けれども、大體の見當だけはついた。

「此度の娘は前のミ違つて大分高いな、己れミ餘り違はないやうだな」ミ、思ひながら、以前のやうに矢つ張り極り悪るさうに、顛え聲で、

「貴女が僕のお嫁さんの候補ですか」ミ媚びるやうな調子で聞いた。

「ハイ左様ですの、お厭でなければ」ミ、云つて如何にも羞かしさうに、口元へ袂を當てながら、俯向いたなり云つた。で、又もや骨右衛門さん、精魂を失つて、

「ミミミミミ致しまして、貴女の方がお厭でなければ」ミ、云つたが第一回に失敗したところがムラ／＼と胸に浮んだので、

「あの、貴方は大分高いやうですが一體幾何位ありますか」ミ、漸くそれだけのこ

を聞いた。女は些つと躊躇したらしく、

「あの、少し高いのですのよ」ミ、甘つたらしい聲を出して答へたので、骨右衛門さん益興奮して、

「イヤ兎角女は姿勢美が大切ですからな、高い方が好いですよ」ミ、甘黨を發揮して阿諛つたのだつた。で、女は急に嬉しさうに、ニコ／＼しながら、

「眞實ですか、それが眞實でしたら、妾嬉しいわ、ね、貴方、嘘でないの」ミ、女郎のそののやうに、びたりと身體をつけて骨右衛門に凭れた。で、骨右衛門さんは足の爪先きから、髪の毛までがワク／＼するやうな、快さを感じながら、

「ほ、眞實ですとも、う、嘘なんか云ひません」ミ、殆ど衝動的に云つた。

「あら……さう——妾嬉しいわホ……」ミ、笑つたが靨なんかは鐘ミ太鼓で、捜し歩

いても影も形もなかつた。それも其筈だ。骨右衛門さんと同じやうに、一片の肉をも見出すことの出来ない、筋右衛門さんだつたのだ。

で、追かに精魂を失つて居た。骨右衛門さんにも、氣が附いたので、

「あの、高さは幾ら位ありますか」こ、力強い聲で聞いたのだつた。

其塵に高い方でないわ、五寸足りないんですもの」こ、辯解でもするやうに云つた。

「それぢや、四尺五寸ですか」

「イ、エ、違つてよ」

「では、三尺五寸ですか」

「あら、厭だわ、其塵一寸法師でなくつてよ五尺五寸よ」こ、如何にも得意さうな口調で云つた。骨右衛門さんは些つこ驚いたやうに、

「ウン!! 高いですな、そして腰の廻りは幾らありますか」こ、聞いたのだつた。

「さうね、餘り太くはないわ、ごちらかこ云へは細い方よ、八寸二分なのよ」

「ワハア! お湯屋の煙突か電信柱の代用ですな」こ、思はず知らず云つた。で、女は些つこ腹立たしさうに、

「貴方だつてさうよ、ですから好い夫婦でなくつて、ね、貴郎、さうでないの」こ、迫るやうに云ふのであつた。

骨右衛門さんは何こ思つたのか、苦い笑ひ方をしながら、

「それは兎に角、お年は幾年ですか」こ、元氣なさうに聞いた。

「あの、九歳ですの」

「九歳こ云はれるこ十九歳のここですが」こ、骨右衛門さん幾らか望みを託しながら

80 重ねて聞いた。

「イ、エ、違ふわよ」

「それでは二十九歳ですか」

骨右衛門さんの顔はだんくく曇り出した。

「さうでないのよ、便所の隣家よ」

「便所の隣りこは」

「始終臭い(四十九歳)よ」

「ワハア……勘忍……勘忍！」

謝罪た、許して呉給へ……たゝ頼むよ——」

骨右衛門さん又しても、ブルくく頭へながら、頭をペコくく下げながら、謝罪するのであつた。

おへそ家の入り

女はカラくく笑ひながら、

「厭で幸ひ、骨右衛門さんなんか、大嫌ひよ、妾、デブ右衛門さんが大好きなのよホ、」

こ、堪えられないやうに笑ひながら、何れへか去つたのであつた。

四、曲つた十字の字

第一回云ひ第二回まで見事失敗した。骨右衛門さん愈以て悲観した。一つそのこゝこ「あの世へ行かうか」こも考へたが、「命あつての物種だ、身體あつての物種だ、辛棒あつての嫁種だ」こ、考へ直し又しても「ちんくさんく」こ嫁はないかくで探し歩くのだつた。

81 「犬も廻れば棒に當る」のたこへ、決して悲観するこゝこはない。四百萬人の人口を有

する東京には却々物好きの奴もある。すけべもある。

甘黨もある。二本棒も三本棒もある。須からく意を強ふすべしだ。

「ちんく〜さんく〜」で遣つて居る裡に又しても、一人の候補者が出来た。

此度は前のよりか餘程若いのであらう。大層羞かしかつて、腰の邊りから俯向いて、少しも頭を上げない。で、骨右衛門さん、心の裡で喜んだ。

「兎角女云ふものは、羞かしかるやうな奴でない。不可ん、女性の羞恥心云ふものは實に貴いものだ、男逢つて見て見ん振したり、眞赤な顔をして俯向く所は何も云へない、快さを感じるものである。彼女も確にさうなんだ有望……有望……」

さう思ひながら、

「若しく貴方が僕のお嫁になつて下さるんですか」以前に違つて明瞭した言葉

で、活潑な態度で聞いた。

「ハア、左様で御座んすわいな」女は腰を曲けたなりで、而も婆聲で答へた。

が、骨右衛門さんは少からず、昂奮して居るので、そうしたここには一向平氣であつた。

「其塵に羞かしからなくとも好いぢや有りませんか、腰を延して立つたら如何ですか」サイノロチイーを發揮しながら云つた。

女は別に極り悪さうにもせず、

「其腰が其何ですよ」不得要領なことを云ふので、骨右衛門さんつかぐか進み寄つて、

「ぢや、僕が延してあげませうよ」さも親切さうに云つたが、女は餘程驚いた

らしく、「さうさう致しまして、其座こきされては、たゞ大變です、腰が折れて了ひますよ」こ、今にも泣き出しさうな聲で答へた。骨右衛門さんは合點が行かないやうな表情して、

「それぢや、貴方は腰が延びないんですか」こ、急に元氣を失つたやうな口調で聞いた。

「左様で御座んす、些つこ其何で御座んす」こ、女は大分躊躇したらしく答へた。骨右衛門さんは焦々して、居たが、聽て、

「一體貴方は何歳なんですか」こ、荒々しく聞いた。

「ハイ、あの何で御座んす、十云ふ字こ十の字の曲つたので御座んすよ」

「何ですつて、十云ふ字こ曲つた十の字ですか」

「左様で御座んす」

「それぢや、十七なんですか」

「イ、エ、それが反對で御座んすよ」

「ワハア！ それぢや七十か、己れの方が腰が抜けた！ たゞ助けて呉れ！」こ骨右衛門さん腰を抜かして眞蒼な顔してはひ出したのであつた。

斯うした順序で、それからそれへこ失敗に終り、骨右衛門さんの鐘こ太鼓の嫁探しも、さうく失敗に終つたのであつた。何こ面白い骨右衛門ではないか……。

消え行く乙女

一、心の迷ひ

學校の門を出るに、英子は妙に興奮して、色々なこころが、胸にヒタ／＼と浮び、純な、無垢な、彼女の心にも、世の中のせち辛いこころが、マザ／＼と感ぜられた。殊に昨晚母が泣いて、口説いたこころなきが、眼の前に展開されて、彼女の心を烈しく、焦ら立たせるのであつた。

さうしてお母さんは彼塵に判らないのでせう、兄さんなんか藝者を妻にして被居るんですもの、妾が満さんご夫婦になるのは當然へだわ、別に悪いこころなんか少しもないわ満さんは立派な人ですもの、妾の夫として少しも耻かしくないわ、それにお母さ

んは絶対に不可ないなんつて仰有るんですもの、妾、眞實にさうしたら良いんでせう」さう考へるに、因襲的倫理に捉はれて居る、母の舊思想が悲しかった。父の遺言を受けて居る、可川辯護士の一徹も悲しかった。徳子の嫉妬的態度も悲しかった。斯うした色々な悲しいこころや、憎らしいこころが、浮んで来るに従ひ、何として、堰き止めるこころの出来ない、一人娘の我儘さが、潮のやうにムラ／＼と迫つて来るのであつた。

「さうして世の中の人達は皆んな斯うなんでせう、解らず屋許りで眞實に厭になつちまうわ」

此塵こころを思つたときは、恐ろしい憤怒と焦燥の爲めに、烈しく動亂せずには居られなかつたのであつた。

「良いわよ、妾、屹度自分が思ふ通りに見るから、お母さんが何云つたつて、誰が何云つたつて關はないわ、必ず自分の意思を徹して見るから」

英子は心の裡でかう叫びながら、太息を吐いた。

世の中の總ての人が、總て反對しても、自分の意思を飽くまで、貫徹しやうと思つた。戀人一人さへ自分の味方をして呉れるなら、世界中の人を凡て敵にしても、屹度自分の意思を貫いて見やうと思つた。否、さうした喧々囂々たる批評の中を超然として、自分の愛する者を手を取つて、自分の行くべき道を歩いて行く——それは如何にも立派なところではなからうか、痛快なところではなからうか、そしてそれが眞に、自分の進むべき道ではなからうか、人間として有意義な生活ではなからうか、義理や、人情の爲めに、貴い感情をムザムザと蹂み躪られる——それは實に悲惨なところである、殘

酷なところである、そして意味のないところである、

さう思ふに、彼女の胸は湧き立つやうな、痛快さを感じた。が、それは次の連想に因つて、端なくも覆へされた。

若し自分がさうした親不孝をしたなら、母はさうなるであらう、彼の身體の弱い母は一體さうなるであらう。

それを考へるに、娘氣の今更ながら、自分の不孝を想はずには居られなかつた。色々な心配の爲め瘦せ衰へたヒステリックな、母の憐れつほい面影が、アリくも眼の前に現れ、云ひ知れぬ懐かしさ、同情を感じるのでつた。で、彼女は思はず、

「お母さん許して下さい！」と、人知れず心の裡で叫んだ。

聽て母の面影が消えるに、此度は身にも親にも代へられないと思ひつめた、戀人満

の面影が、何時の間にか現れて、媚びるやうな微笑を送るのだつた。で、彼女は思はず知らず、美しい微笑を浮べたのである。そして郊外電車の緩るやかな、廻轉に伴れて、次から次へに、過去の戀物語りが展開されて行くのだつた。

さうした想像を描いて居る裡は、英子の心は浮き立つ程、嬉しさを覺るのだつた。で、彼女の顔は自然に赤らみ、耳まで眞赤になつた。

「内田さん、さうかなすつたの、大層顔が赤くなつたわよ」
友達の桂子是不審さうに聞いた。

「イ、エさうもありませんわ」

英子は俯眼勝になつて、極り悪さうに答へた。彼女の心の悶えを知らない桂子は、尙も不思議さうに、彼女の顔を覗くやうにして、「でも、大層赤くなつたわよ、病氣に

なつたのでないでせうか」

さう云ひながら、同じ友達の正子に向ひ、

「ね、山本さん、内田さんの顔は赤いわね」

「エ、さうね、さうしたんでせうか」
正子も共鳴するやうに云つた。で、益々英子は極り悪さうに、心持ち俯向いて了つた。

其裡に電車は大久保に着いた。英子は友達と別れて、釘付けにされたやうな重くるしい踵を替しながら、さぼく我家へ歸へるのであつた。

「さうしやうか知ら、家へ歸ればお母さんに泣いて口説かれるし、徳子さんには辛く當られるし、眞實に妾困ちまうわ」

微かに獨り言を云ひながら、歩くこもなしに歩いて居た。丁度其時だつた。背後の

方から、

「英子さん、英子さん！」と、呼び止める男性の聲がした。で、彼女は驚いたやうに急に振向いた。

「あら！ 満さん！」と、叫ぶやうに云つて、駈寄つた。が、戀しさも懐かしさも、悲しさが、ごつちやに込み上げて來たので、急に言葉が續けなかつた。それでも戀人の歡心を買ふだけの、嬌態は失はなかつた。否、急に羞かしさうに可愛らしく首を傾けて、襟を正したり、妙な嬌態をして身體を優しく揺ぶいて居た。

満は昂じ來る感情が、抑へ切れないやうに、烈しく身慄ひしながら、英子の手を執つて固く握り占めた。

「英子さん、暫くでしたね」と、感極まること云つたやうな調子で、情火に燃ゆる眸を

彼女の顔に向けながらグン／＼自分の前に引き寄せるやうにした。で、英子は總てのこころを忘れたやうに、男の胸に顔を埋めて、

「ね、満さん、妾、逢ひたかつたわ、眞實に逢ひたかつたわ」と聲を慄はせながら、力強く詰るやうに云つた。そして握手された手を握り返した。

男は急に落附いたらしく、
「僕だつて矢つ張りさうでしたよ、淋しくてね」と、云つて力なささうに口を緘んだ。

其時彼女はフラ／＼と、自分の決心を訴へる氣になつた。同時に彼と共に苦樂を伴にしやうと思つた。で、思ひ切つたやうに、

「妾、ね、もう家に居るのが厭になつたの、皆なして妾をいぢめるんですもの、居ら

れやしないうわ、眞實に馬鹿にしてるんですもの、妾、さうしたら好いでせうか」ミ、哀れつほい聲で、訴へるやうに云つた。そして彼の顔を見上げるやうにしてチロリ見えた。其眸は甚だしく潜んで居た。

「さうですか、一體誰が其塵に辛く當るのですか」ミ、満は以外らしく云つたが、心の裡では能くそれ等を知つて居るやうにも思はれた。

「お母さんからして、いぢめるのよ、随分だわね、自分の娘をいぢめるなんて、眞實に人間のやうぢやないわね」

斯う云ひ切るミ、同時に堪へられないやうに烈しく嘔り上げて、サメぐミ泣き出した。其時向ふの方から人が来る氣配がしたので、二人は誰云ふもなく停車場の方へ、足を向けた。歩きながら彼女は色々なことを考へ出した。

一つそのこと、満さんの下宿へ逃て行かうか知ら。そしたらあの頑固な一徹なお母さんも、遂に見放すであらう。さうなれば妾は、天下晴れて満さんご夫婦になれる。若しさうなつたら、妾は何塵苦勞でもする。忍び得られないだけの悲しみでも、堪へられないだけの苦しみでも、満さんご一緒なら、決して辭しない、假令此身が碎けることも、朽ちて滅び去ることも、戀せる二人が手を携へて、俱に苦しみ、俱に楽しむことが出来るなら、それを悲しいことも苦しきことも思はない。否、さうした境遇に一日も早くなりたいたい。肉體上を受ける苦痛より、精神上に受ける苦痛は、どれ程辛いか知れない。

世の中のせち辛いことの、何物をも知らない、英子は此塵ごこを次から次へ考へて居る。勿論男性の心が、那邊に存するか、満の性格が信じられるだけのものである。

か、さうしたことは單調な彼女の頭には、少しも浮んで来なかつた。如何に明晰な頭の所有者であつても、まだ十六歳の春を迎へた許りの、うら若い少女だつた。さうだ、蝶よ、花よこ出来るだけの我儘の下に、育てられた英子には、浮氣のこまに付いては、盲目に等しかつた。

で、彼女は自分が思つたやうに、自分が考へたやうに、總てのこまが、凡て何等のわだかまりもなく、達しられるものであると思つたのだつた。

況や 戀人が、金銭なぞに何等の執着があらうこまは、塵末も考へるこまは出来なかつた。戀は思案の外こまや、如何にせち辛い世の中でも、金銭や、名譽や、地位なごに憧憬に心にもない戀を買ふものは、絶対にないと思つた。少くも満にはさうした野心は、微塵もないものと思つた。自分のやうに金銭も名譽も地位も總ての物を犠牲

にして、戀して居るものこま、堅く／＼信じた。

だから満の爲めなら、假令如何なるこまでも、犠牲にならうと思つた。其處こまを考へて居る裡に、満は些つと英子の顔を見て、

「ね、英子さん、其處にいぢめられるのなら、僕の宿へ來たらさうですか」彼はさう云ひ／＼ステツキを弄くつて居た。

英子は待つて居ました許りに、

「あの、妾、行つても好いの、お邪魔にならならこま」さう云ひながら可愛らしく首を傾むけて愁波に彼の顔を、チラミ見た。そして美しい微笑みを見せながら、さも嬉しさに洋傘を弄くつて居るのだつた。

「良いですこま、來て下さい」彼は軽く肯づきながら、

「だけご、貴女、お母さんが怒つて来たたら、さうしますか」
 た。が、語尾を強めて訊いた。

「大丈夫よ、お母さんなんか来きませんから」

彼女が事もなげに云つて、相手の言葉を一言の下に斥けた。が、男は尙も不安さうな顔して。

「お母さんがお出にならなくとも、あの厭な可川の奴が来ますよ、屹度来ます僕は彼奴の顔を見るのが厭でね」
 吐き出すやうに云つた。

「来たつて好いちや有りませんか、何も妾、可川さんの爲に自由にならなくとも好いんですもの、何處までも妾云ふわ、ですからね、其ん那こそは少しも心配しなかつて好いわよ」

さう云ふ彼女の顔は、恐ろしい憤怒と、強い憎悪とに、因つて溢れて居た。今にも来たたら、心持ち云つて遣らう、お父さんが生活て居られた、當時のここから、今日までのここを云つて、云つて言ひ負して遣らう。

さうした怒りの色が、優しい美しい彼女の顔全體にアリく、こ、湛えて居た。

そこに一人娘の我儘さが、遺憾なく現れて居るかのやうに思はれた。

丁度二人が停車場へ着いた時だつた。彼女の爲めには、殆ど仇敵であるかのやうに、思はれて居る。徳子が突然に現はれた。

「あら！」
 英子は烈しく叫んで急に立ち止まつた。其の瞬間彼女の小さい胸にふさはしい程の大きな波動が、ドキリく息苦しい程、烈しく迫つて来た。

それと同時に戀人の所へ行くことが、端なくも覆されたのが、心の底に喰ひ込む程

口惜しかつた。

「英子さん、何處へ被行るの、何邊へ行被るお決心でしたの」

徳子は少し焼け氣味になつて、皮肉らしく訊いた。

「何處へ行つたつて好いちやないの」

彼女はさもく、憎らしさうに投げるやうに、云つて鋭く睨めつけた。

「でも、お叔母さんが心配して被居るんですもの、早くお歸りになつた方が好いわ」

徳子は前よりも、優しく宥めるやうに云つた。其のとき満は何を思つたのか、物も

云はずブラットホームに駆け込んだ。が、道に英子は彼を追ふ勇氣は出なかつた。恨

めしさうに戀人の後姿を見て急に俯向いた。

「噫！ 何云ふ意地の悪い女だらう、何時でも人の戀地の邪魔するなんて、眞實に

憎らしい女だ」ミ、思もながら、徳子の顔を盗むやうに見た。

徳子は以前に變つて、なれくしく、あの、歸りませうよ、満さんはもうお歸りに

なりましたから」ミ、子供でも欺すやうな調子で云つた。で、英子は心の裡では、焦

々して居たが、急に元氣なく頂垂れて、黙々として重くるしきやうに、踵を替へし初めた。

「ね、英子さん、貴女何處へ被行るお決心でしたの、満さんのお宅へでも被行る

決心でしたの、まさかさうぢやないんでせうね、英子さん」

徳子は彼女にすれぐになつて、詰るやうに訊いた。が、英子は俯向いたなり何も

答へなかつた。

で、徳子は妙に興奮して、彼女の顔を覗き込むやうにしながら、

「あのね、英子さん怒つちや不可ませんよ、妾、貴女のお爲めを思つて言ふんですか

「さう云ひながらも、俄に躊躇したらしく、「矢つ張り止ませう、怒られちや詰らないから」云つて身體を振りながら在らぬ方を眺めて居た。

さう云はれて見るに、人情として尙更訊きたいものである、英子も矢つ張り訊きたくなつた。猫が犬を見たがる——そののやうに、強い憎悪と烈しい不安を懐きながらも、

「徳子さん、な——に」云つて、急に曇つた顔を擡けながら、迫るやうに云つた。

「でも、貴女、怒るんでせう」

「イ、エ、怒らないわ、何だか知らんけさ」彼女には徳子の云ふことが、略察しられずには居たが、それでも何もなく訊きたかつたので、焦立つ心を枕へ押しながら、平氣を装つて云つた。

「屹度怒られない」云つて、徳子は念を押すやうに語尾を強めて、云つた。

「エ、屹度怒らないから云つて頂戴」云つて、彼女は軽く肯つきながら答へた。

「ちや云ひますわ、外のこゝでないのよ、矢つ張り満さんのこゝなのよ」

さう云つてから、急に行き詰まつたやうに、俯向きながら、持つて居た風呂敷包を些つと開けて見たり、又包んで見たりして、餘程言ひ憎くさうにして居た。

「徳子さん、さうした云ふの、言つて御覽なさいよ、怒らないから」彼女は少し焦々して云つた。で、徳子は愈思ひ切つたやうに、太息を吐いて、

「あのね、貴女が信じて居られる満さんは駄目よ、あの方は恐ろしい方よ、そりやもう恐ろしい方よ、ですからね、貴女早く思ひ切られた方が好いと思ふわ」

徳子がさう言ひ切つたとき、英子の顔は忽ち狂人のやうに眞蒼になつた。で、徳子

は慌ただしく、

「英子さん、怒つたの、怒らないなんつて云つて置いて、妾、怒るのなら、もう何も云はないわ、御免なさい、悪かつたわね、だけ英子さん、妾貴女は従姉妹ですから、お互に注意しつこしなくちやならないつて、お歿くなられたお叔父様が仰有つたんですもの、勘忍して下さい、ね英子さん」こ、詫びるやうに云つた。

「妾、何も怒つりやしないわ」

其の聲は悲しさうな憤りの聲だつた。それも其の筈である、彼女の美しい眸は熱い涙が一杯になつて居た。

「だつて貴女怒るんですもの、妾、もう何も云はないわ、怒られちや厭ですもの」

「其麼こ云つたつて、妾、何も怒るこはしないわ、何云つたつて好いこよ、妾

は妾ごしての考へがあるんですもの、何こでも仰有いよ」

「それぢや、英さんは矢つ張り、満さんご結婚なさるお決心なの」
徳子は眼を圓くして、力強く訊いた。で、英子は餘程

「エ、さうなのよ」こ、言つて遣りたかつたが、娘の悲しさ烈しい羞耻心の爲め、何も答へることが出来なかつた。で、俯向いた儘沈黙を守つて居たのであつた。

「だけこ、そりや駄目ですわ、貴女が何こ仰有つても、お叔母さんだつて、可川さんだつて御承諾なさらないわ。絶対に御承諾なさらないわよ、満さんごの結婚には誰だつて不賛成よ、ですからね、早く思ひ切られた方が好いと思ふわ、でない貴女のお爲めにならないわ」

相手がさう云へば云ふ程、英子の心は強い反感心の爲めに、逆上した。我が儘に育

てられただけに、反感心も亦強かつた。

「何、親戚の人達が總て、反對しても自分は、自分の進むべき道に、屹度進んで見せる、誰が何云つても、自分には自分だけの自由がある。人の爲に其の自由をムザくこ、蹂み躪られて堪まるものか、必ず自分が思つた通りに遣り徹して見せる」
さう決心するこ、彼女に絡る總ての人が、咒はしく敵のやうに思はれてならなかつた。で、彼女は顔も心も、火のやうに燃へ初めた。

二、母の心

「お母様がお呼びで御座います」こ、云ふ女中の聲を聞くこ遣に英子もドキツこした。又昨晚のやうに泣いて、口説かれるのかこ思ふこ、母の側に行くここが、恰で戰場

へでも行くやうな、不安こ恐ろしさを感ぜずには居られなかつた。

又お母さんが厭なここを言ふんだわ」こ、彼女は微かな聲で獨語を云ひながら、立ち上がった。そして苦しさに胸の邊へ手を當ながら、元氣なくこほくこ母の室へ行くのだつた。

「お母さん、なーに」こ、相變らず無邪氣な聲で、不安さうな眸を母に向けて訊いた。

「あゝ、英子かお這入り」こ、母は何事もないらしく優しく云つた。が、心の迷つて居る彼女には、何こなく恐ろしいやうな氣がしてならなかつた。で、オヅくしながら云はれる儘に、母の側に座つた。

母の淋しさうな、凋れた顔を見るこ、遣に娘氣の今まで思つて居た、十分の一の勇

氣も出なかつた。否、思はず眸を潜はせた。

「妾の爲に母は自分の身を縮めるだけの心配をして居られるのだ」こ、思ふに新しい涙が、また一時に湧いて來るのであつた。で、彼女は元氣なく口を緘んで、頂垂れて居るのだつた。母は些つこ髪を搔き上げながら、娘の顔を見て、

「英子、お前は今日満さんに逢つたでせう」こ、落附のある調子で訊くのだつた。で、彼女は急に顔を赤らめながら、俯眼勝に母の顔をチロリこ見て、

「エ、停車場で逢つたの、學校の歸りに」こ、憶面なくありの儘を云つた。が、心の裡では徳子が母に、告げ口をしたのだなこ憤つて居た。「お前學校へは行つたんでせう」こ、母は何時になく疑はしく訊いた。

それはもしか、學校へ行くやうな風を見せて、満こ婿曳きにも行くのではないか

こ云ふ疑ひが、あつたからである。若し其塵ここでもあつたら、明日から學校へ行くにも女中を連れて行かせなければならぬこさへ思つたのである。

「お母さん、貴下何云つて被居るの、妾が學校にでも行かなかつたやうに思つて被居るんですか」

英子は如何にも不平らしく、腹立ちしさうに云つて、母の顔をシミ／＼こ見て居た。「なに、さう言ふ理由ぢやないけぞ、もしかしたらこ思つたからですよ」こ、母は辯解らしく云つたが、娘は却々承知しなかつた。

「お母さんも随分ですわね。妾許り疑つてなんだかんだこ云つていぢめるんですもの、妾、口惜しくてならないわ」

今まで従順であつた英子が、急に毛蟲かなんかのやうに、焦々して大家の令嬢にふ

さはしいやうな態度を見せた。

「其處まで温和に、娘を宥めるやうに云つた。何處までも温和に、娘を宥めるやうに云つた。」

「嘘よ、嘘よ、お母さんは嘘つきよ、妾許りいぢめて被居るんですもの、若しお父さんが生きて居らしたら、妾皆云ひつけて遣るんですけ……」と、白い美しい齒を噛み占めて、さもく、口惜しさうに云ふのであつた。

「そりや、妾が云ふことですよ、若しお父さんが居らしたら、それこそ大變ですよ、お前は少しも自分の悪いことを思はないから不可ないんですよ、お前の今日の行ひは何です、それでもお前は良いと思つて居るんですか、お父さんがお前の行ひに賛成なさると思つて居るんですか、お父さんは兎に角、親戚の方は誰れ一人として、お前の行ひ

にいやさお前の思つて居ること共鳴して下さる人はなんですよ、妾はそれが悲しくてならないのです、兄云ひお前までが何云ふ腐つた恐ろしい心を持つて居るんでせう、妾はそれが悲しくて死んでも死に切れないのです、ですからさうか、此の母を不憫と思つたら、満さんを忘れてお呉れ、妾の一生の願ひですから」

母は堪えられないやうに、烈しく啜り上げながら、手を合さん許りに、泣いて云つたのだつた。

で、流石に戀に精魂を失つて居る、英子も母の熱情に、動かされ元の従順さへ返つた。が、さうしても満を思ひ切ることは、死んでも出来ないことだと思つた。

「お母さん、さうして満さんとの結婚が不可ないんでせうか」と、此度は訴へるやうに云つた。

母は得意になつて、辯々と言き初めた。

「そりやね、些つと考へれば何のこゝちはないやうですが、色々不可ないこゝちがあるんですよ、第一これから世の中に立つて行かうとするには、眞面目でなければ駄目ですからね、其の眞面目云ふこゝちが満さんには缺けてゐるんですよ」

母が斯う言ひ切つたとき、英子は急に膝を進めて、

「さうして満さんが、眞面目でないんですか、大學を出た方ですから立派な方ですわ」こゝ、母の言葉を打ち消すやうに云つた。

「お前が云ふやうに學校を卒業したから云つて、必ず眞面目な立派な人だと言ふこゝちは出来ませんよ」

「それぢや、満さんはさうして眞面目でないんですか」

英子は烈しく緊張した顔を母に向けながら詰るやうに訊いた。

「お前も能く考へて御覽、一獲千金を夢見てゐる人が、眞面目であるかさうか判るでせう」

「ぢや、お母さんは相場をしてゐる人は總て眞面目な人でないと思つて被居るんですか」

「まあ、さうですね、眞面目な商買でないから」

「それが、お母さん間違つてゐる云ふんですよ、商賣に因つて人の性格を判断するなんつて、其塵頭ですから妾困ちまうんですわ、第一相場云ふものは、お母さんなんか考へて被居るやうな危険なものでないさうですよ、其の原理原則を知つて其の軌道さへ誤らなければ立派に成功が出来るんですつて、——妾満さんから詳しく訊いて知

つてますわ、ですから妾、母さんの仰有るごきなんか少しも信じませんわ、嘘のごき許りですもの」ミ、又しても熱に浮されたやうに云ひ出した。が、母もそれには負てはるなかつた。

「其塵ご云つたつて駄目ですよ、世の中の人が、承知しませんから」ミ、母も幾らか腹立たしさうに云つた。

「もうお前には何も云ひません、彼邊へ行きなさい！」ミ、母は嚇まなつて叱咤するやうに云つた。

「エ、行きますわ、幾らだつて行きますわ」ミ、英子は焦々しく云つて立ち去つた。最早そこには大家の娘としての、慎ましやかさは少しも残つてゐなかつた。

母はさうした娘の態度を見るにつけ、云ひ知れぬ悲しさが、マザ／＼に胸に浮かび

腸でも扶られるやうな、恐ろしい苦悶を感じた。

何んご云ふ情ないごきであらう。ごうかして一日も早く娘の過去を矯正なければ、夫に對しても、可川に對しても、許嫁の矢下に對しても、申譯がない。そして親戚の人に對しても、世間の人に對しても、義理が濟まぬ、面目ない。噫！困つたごきだ。

一體ごうすれば好いのであらう。これまでのやうに彼女自身の我儘の下に、放任して置いては、何時になつても、娘の誤りを矯正するごきは出来ない。嚴重な監督の下に取締るより外に途がない。可愛さうではあるが、浮世の義理には代へられない。

さう思ふご、母の心は恐ろしい苦悶ご、焦燥の爲め全く動亂した。

「さうだ、今晚にでも娘の意思を翻させなければならん、でなければだん／＼に深入りして、益々取返しに附かないごきになるであらう」

斯う考へて来るに、今の場合娘を放任して置くことは、恰も大海に小船でも捨て、置くやうな、不安さこそ恐ろしさを感じるのであつた。さうだ一面に降り積もつた銀世界をなした原野を一人で、往き行させるやうな、危ふさを感じずには居られなかつた。道もなければ、何等目標もない、廣い野原を自由な、快活な、持つて生れた其の儘の——世間の何物をも知らない、可憐な娘を往行させて置く以上、遂には難所に入り、行くことも、歸ることも、出来ない、悲惨な運命に陥入るであらう。でなければ崖に落入り、再び這出ることが、出来ない悲劇が生れるかも知れない。

其處ここを考へ出すに、ヒステリックな母は頭がボツミして、少しの間も枕つこしてはゐられなくなつた。

「英子や！ 英子！」と、恰で悲鳴のやうな聲を出して、娘を呼ぶのだつた。

「お母さん、何ですか」と、英子は不安さうな、暗い表情して這入つて来た。

さうした娘を見るに、今更ながら厭なこころを繰返すのが、母にして何よりの苦痛に違ひなかつた。

で、母はテレ隠しのやうに、急に立つて、

「別に用事はないがね、今日此廢物を戴いたから、お前さんにあけやうと思つて」云ひく綺麗な菓子折を取り出して、彼女の前に置いた。

「綺麗ですわね」と、英子は云つたが、別にそれを欲しもしないやうであつた。

「開けて御覽、何が這入つてゐるか」

母はさう云ひながらも、何かの機會に厭なこころを言ひ出さうとして、始終口をムグくさせてゐるのであつた。

英子は母の心も知らず、母が言はれる儘に些つこ開けて見て、
「お母さん、西洋菓子よ、色んな物が這入つてよ」さう云ひながら、元のやうに蓋をした。

「お上がりよ、お好きなのを」

母は娘が手をつけないのが、何もなく心掛りであるやうな表情で、促して見たが、娘は軽く首を振つて、

「妾、少しも食べたたくないわ、お母さんお上りなさいよ」云つて膝の上で両手を揉むやうにしてゐた。

さう優しく云はれると、母の心は急に變つた。今まで張つめてゐた勇氣も、何時か知ら、潮の引くやうに消え、娘に對する愛の爲、至たく溺れて了つた。

「なに、今日に限つたこゝこはない、何時か云ふ時があるだらう」

母は斯う思ひながら、彼女の顔をシミ／＼と見た。見れば見る程、娘の心がいぢらしく不憫でならなくなつた。

假令娘の行ひが正しいものでないにしても、生れて初めて戀した、其純な戀を無謀にも残酷にも、現在母の手で蹂み躪らなければならぬこゝこは、何と云ふ悲惨なこゝこであらう。

勿論娘の行ひが、正しくないこゝこは、言ふまでもない、今日になつては、最早其麼問題ではない、燃ゆるやうな初戀の兆が、娘の全身に滲えてゐるのだ。其強い恐ろしい感情の働きを、只一片の夢を斷念めと攻める母は、慈愛深い親としての道であらうか、それが子に對する母の道であらうか、世の中には斯うした問題は、幾らもある。

そして恐ろしい取り返しの附かない、悲劇を生んでゐる。
さう思ふご母の心は、全く逆上して了ふのだつた。

さうだ、娘の行ひが正しくないご云ふのは、自分にも其罪があるのだ。否、娘ご同罪である。娘を墮落させた母は、娘の罪よりか深い理由だ。何にも知らぬ——何事も解らない、純な、無垢な、持つて生れた其儘の、自由な、快活な、娘を墮落させた罪は、母にあるのだ。母が其の監督の方針を誤らなかつたなら、娘は決して墮落しなかつたであらう。それに自分の罪を棚に上げ、娘の罪のみを問ふのは、餘りに得手勝手である。親として子に對する道でない。

斯う考へて來るご、満ご同居させたごごが、一生の誤りであるごごを想はずには居られなかつた。同時に彼を信用して——さうだ、娘の言ふが儘に、一緒に外出させた

ごごなきが、判然ご眼の前に浮んで、名狀しがたい心の苦悶を感じるのだつた。

「噫！ 妾は何故に「男女七歳にして」の孔子の言葉を忘れたのであらう。さうして何時までも娘を子供々々ご思つてゐたのであらう」

これが自分の一生の誤りであつた。賢母の典型ごとしての母でなかつたのだ。内田家の母堂ごとしての自分でなかつたのだ。文官のいやしい母に過ぎなかつたのだ。噫！ 自分は何ご言ふはいたない女性であつたらう。文官の徒なれば鬼に角、社會でも有樞の人物ごして、認められてゐる人の妻が——此の狀態は何事であらう。兄ご云ひ妹までが社會の人の耳目を引くやうな、墮落をするごは何事であらう。

明晰な頭の所有者の娘を持つたのが、却て身の破滅になつたのだ。若し娘にして普通以下の平凡な、女性であつたなら。斯うした悲しいごごもなかつたらうに、幸か不

幸か、娘は人一倍に明晰な頭を持つてゐる。そして人一倍に早熟なるが爲め取り返しの附かない、情ない、悲劇が生れたのだ。其處こゝを思ふに、娘の恰憫が悲しかつた多血性で早熟であるのも悲しかつた。で、母は思はずハラ／＼に、熱い涙を膝に零した。英子は不思議さうに、母の顔を見詰めなから、

「お母さん、さうしたの、何か悲しいこゝでもあるの」こゝ、無邪氣に首を傾むけて、いたわるやうに訊いた。で、母は益々烈しく迫つて来る悲哀の念を枕つこ、押へながら、

「お前のこゝを考へるに、わたしや、悲しくつてしようがないんですよ」こゝ、堪へられらいやうに云つて、サメ／＼に泣き出した。

「さうしてなの」こゝ、英子は眼を圓くして、詰るやうに訊いた。

「お前は何にも知らないが、満さんはお前が思つてゐるやうな人でないよ」母は悄然と云ひ切つて、又烈しく泣き出した。戀に精魂を失つてゐる、英子は戀人の悪いこゝを云はれるに、速ぐムキになつて怒り出すのであつた。

「そりや、お母さんさうしてなの、何處が不可ないんですか、満さんが何が悪いのですか」こゝ、烈しく激昂して言ふのだつた。

「お前さんのやうに速ぐ怒つちや、お話しも出来やしないよ」こゝ、母は吐き出すやうに云つてホト／＼困つたらしく頂垂れて了つた。

「だつて、お母さんは満さんの悪口許り言ふんですもの、妾、口惜しくてならないわ」英子は又熱に浮されたやうに、顔全體に烈しい痙攣を起しながら、如何にも腹立

たしさに云ふのだつた。

母は娘のさうした態度を見るに、又新に悲しさが、増のであつた。

さうして此處になつたのであらう。幾ら初戀は云へ、餘りに無謀である。亂暴である。そして又悲惨である。噫！ 悲しいことだ。一體さうすれば、此恐ろしい戀を忘れさせることが、出来るであらう。さうだ、これを忘れさせるには、必死の覺悟がなければならぬ。可愛の娘をも泣かせなければならぬ。でなければ、何時になつても、改まる日が來ない。

さうだ、今の場合、溺愛してゐることを許されない。決死の覺悟を持つて、娘に對しなければならぬ。さうでなければ、娘の爲めにもならぬ。又夫や、可川や、矢下に對し義理が濟まぬ。今娘を悲しがらせることは、娘の將來の爲である。子を思ふ母に

しての道である。娘が満の爲に弄ばれてゐる以上、何時かは悲しい日が來るのだ。其の悲しい日をべんくして、親として觀望して居られやうか、天にも地にも只一人しかない娘に對し、悲劇が起るのをさうして、擲つちやつて置かれようか、自分の生命に代へても助けなければならぬ。否、可愛の娘の爲であるなら、老い先き短い此の母は、總てを犠牲にしても關わぬ。

娘が正理の道を歩いて呉れるなら、自分は喜んで、子の爲に犠牲にならう。社會の人から嘲笑されたり、憎まれたり、怒られたりするやうなことさへなければ、老い先き短い此の母は、進んで娘の爲に犠牲にもならう。可愛の娘が正義な、何等のわだかまりのない、眞直な道を進んで行く——それは母にして、子を愛する親にして實に愉快なことであらう。痛快なことに違いない。

さう思ふに潔癖な、正しい心の所有者である母は、ムラ／＼と動かされ、俄に鬼のやうな——否石のやうに堅い、鐵のやうに強い心持ちにならずには居られなかつた。

「英子！ お前が何云つても、妾の眼が黒い間は満さんと一緒にさせませんよ！ ですから能く考へて早く思ひ切りなさい！ でないとお前の爲になりませんよ！ 妾はお前が可愛い、可愛いだけにお前が云ふやうに許りさして置けないんです！」

母は鬼にでもなつたやうな、氣持になつて、これだけのことを云つた。

で、英子は我を忘れて、泣き倒れたが、最早母は娘を慰めやうとはしなかつた。慰めて遣りたいのは、山々であつたが、娘の爲を思ひ、世間の義理を思ふに、何として、慰めて遣る氣にはなれなかつた。只心の裡で人知れず泣くのみだつた。

其の時の母の心は、そのやうであつたらう。天にも地にもかけ替へのない、可愛い

一人娘が世を恨み母を恨んで、泣き叫ぶそれを見て只だ一片の同情的言葉をかけて遣るここが出来ない運命にあつた。母の胸は張裂けるやうな思ひがしたであらう。死んで行くそれよりも、辛かつたであらう。それに満この結婚を反對すればする程、英子は一層烈しい反感心を抱いて、狂氣のやうに母に迫るのだつた。

「お母さん！ そりや無理です！ お母さんが其座に仰有るなら、わたしや死んで了ひます！ 死んで満さんと一緒にになります！ 屹度一緒になつて見せます！」

女性の憤しやかさも何もなく、叫び狂ふのだつた。が、母は一言の愛撫的言葉も發しなかつた。

「お母さんは御自分の子は可愛くないんですから、もうお母さんになんか何も云ひません！ 何も頼みません！ 妾は死んで了ひます！ 死んでお父さんに皆な云ひ付け

て遣ります！ エエ！ 口惜しい！」と、狂つた獅子のやうに暴れ廻るのだつた。聴
て荒々しく立ち上つて、

「お母さん！ 貴下は鬼です！ 鬼です！ 恐ろしい鬼です其魔恐ろしい人にもう
何も云ひません！」と、毒吐きながら、男のそのやうに亂暴に出て行つた。

で、母は英子が去るに同時に、「ワツ！」と叫んで泣き倒れたのであつた。

あのやうな恐ろしい、権幕では到底自分一人の力では、娘を押へ得ることは出来な
い、此の上は可川辯護士の力を借りるより外に途がない。

「さうだ、早く可川さんをお招きして力を借りよう」

さう云ひながら、母は女中を招んだ。

「お叔母さん、何か御用で御座いますか」と云ひつゝ、しきやかに、這入つて來たの

は徳子だつた。

「あゝ！ 徳子さん、濟みませんがね、可川さんのお宅へ電話をかけて先生にすぐ
來らして下さるやうに頼んで呉れませんか、急に用事が出來たからつて」

母は出来るだけ、平氣を装つて云つたが、其聲は何もなく悲しさうに顫え聲だつた

「ハイ、畏まりました」と、徳子は慎ましやかに、一禮して去つた。

さうした慎ましやかな、人の娘を見るに、母の心は又新に、悲しさが増すのだつた。

三、心の焦燥

英子の母は悄然として、色々な悲しい事實をそれから、それへ考へて居る裡に、

徳子は電話をかけた結果を叔母に報ずる爲め再び現れた。

「あの、さうしました。先生は居らしたかね」さ、叔母は待ち兼ねたやうに、否不安
さうな眼を徳子に向けて訊いた。

「イ、エ、御在宅で御座いました。速くお出下さいますさうで御座います」
徳子はさう言ひ切つて、立ち去らうとしたので、

「あゝ徳子さんあんたにも、御相談がしたいんですがね」さ、叔母は些つと躊躇した
やうな表情を見せながら、

「實はね、あんたも知つて居る通り、英子の身の上ですがね」さ、云つて急に暗い表
情をした。

徳子は叔母の心に、同情するやうに俄に、頂垂れて悄然とした。叔母はさも當惑し
たらしく尙も言葉を續けた。

「妾の考へは斯うなんですよ、これまでのやうに溫和しく娘が言ふことを利いて居
たのでは何時になつても、我が儘が矯正理由がないから、學校へも遣らずに暫く家に
置かうと思ふんですがね、あんたは何ぞ思ひますか、叔母は涙を臉に宿しながら、
さも悲しさに云つた。

で、徳子も元氣なく、頭を擡けながら、

「それが宜しう御座いませう、でないに満さんの爲に連れて往かれるか知れません
からね」さ、叔母の言葉に共鳴した。

「全たくですよ、其儘ここがないことも限りませんからね、若し其儘ここがあつたらわ
たしや眞實に皆さんに何ごも申譯が立ちませんから」さうしやうと思つて居るん
ですよ」

叔母の言葉はだんくき、泣き聲になつた。徳子は思ひ出したやうに、

「今日だつて眞實に危ない所でしたの、今少し妾の歸りが遅かつたら、英子さんはお家へはお歸へりにならなかつたか知れませんか、お二人で停車場へお這入りになつたんで御座いますもの、確満さんの所へお出でになるお決心でしたのでせう」き、恰で話しても聞いて居たやうに云ふので、叔母は益々眼を圓くして、膝を進めた。

「さうかね、それぢや、少しも油断がなりませんね」き、愕然として云つた。

恰度その時だつた。可川先生が行らした云ふ女中の取次ぎがあつた。で、徳子は去つた。徳子が去るご同時に、這入つて來たのは、可川辯護士だつた。

故博士が信頼されて居ただけあつて、何もなく人格の高い、冒すごこの出來ない立派な紳士だつた。

で、英子の母は、可川辯護士を見るご、もう嬉しさが隠し切れないやうに——さうだ、歿き夫にでも逢つたやうに——今までの不安も悲しさも——總てを忘れたやうに、イソ／＼しく彼を迎へるのだつた。そして話すごも、賢哲な母堂にも、ふさわしく矛盾したごを云ふのであつた。それも其の筈だ身にも親にも代へられないご思つて居る、可愛の娘が、狂者のそのやうに、暴れ廻るのだつた。さうした悲しい事實を救つて呉れる者は、一人可川辯護士のみだつた。

其の杖も柱も、思つて居る彼に逢つたのであるから、如何に賢哲な母堂も雖も矢つ張り女性である。弱き女である。悲しさご喜ばしさご、ごつちやに込み上げて來たので、要領を得ないのも無理はなかつた。

が、可川には大體の要旨が解つたので、

「併しそれはごう云ふもんですかね、却つて相手の感情を害するやうなごこになりやしませんか、監禁するやうなごこをしちや」こ、彼れは首を傾むけながら、心懸かりでもあるやうに云つた。

「イ、エ、監禁するご云ふのぢや御座いませんよ、暫らく學校を停めさせて家に置きたいと思ふんで御座いますよ、でないご満さんの家へ逃けて行くか知れませんからね、若し其麼ごこがあつたら、大變で御座いますから」

英子の母は餘程、落附いて明瞭に云つた。

「逃けて行かれるなんつて、まさか其麼ごこはないでせう」

相手はニツコリ微笑みながら、軽く受け流すやうに云つた。が、英子の母は益々興奮して。

「イ、エ、ごうしまして、今日なんか眞實に危なかつたんで御座いますよ、満さんが連れに来て停車場まで一緒に行つたんで御座いますよ」こ、何を思つたのか誇大的に眼を圓くして云つた。

「さうですかね、それぢや警戒する必要がありませんね」こ、可川は初めて共鳴するやうに云つた。

「ですから、ごうしても、今暫くは學校を停めさせるか、それでなければ毎日女中を連れさせて通學させるやうにしなければ、安心が出来ませんからね、それにしたつて授業中に、逃げ出した日にや何にもなりませんから眞實に困つて了ひましたよ」こ、母は悲しさに云つて太い息を吐いた。

「さうですね、其麼なのでしたら、暫らく學校を休ませて、貴下の監視の下に置く

「ここも悪くはないでせうね」ミ、可川は餘り乗り氣のしないやうに云つて、些つミ首を傾むけた。が、間もなく言葉を續けた。

「だけミ、餘り嚴重に監視されては却て良くないか知れませんかよ」ミ、注意的な言葉を附け加へた。

「でも、可川さん、これまでのやうに優しくして居たのでは何日になつても駄目で御座いますから、此度は少し嚴重に監視しやうと思つてるんで御座いますよ」

さう云ふ母の言葉には、必死の覺悟が含まれて居るやうにさへ思はれた。

斯うした話があつてから、ミ云ふものは英子は一步も外出を許されなかつた。お湯へ行くのでさへも女中ミ、一緒になければならなかつた。で、彼女の煩悶は益募つて夢現にまで、囁語を言ふやうになつた。さうだ、少しのこゝにでも、焦々して女中

達を怒聲するミ云ふ、亂暴な、無謀な、女性になつた。そして母に其の不法を迫り、老ひ先き近い母を泣かせるやうなこゝは珍らしくはなかつた。

が、母は英子の將來を思ひ、それを枕つミ忍んで居たのであつた。さうだ、母は監視の念を怠らず、彼女の身邊に、付き纏い、益嚴重に彼女を見守つたのであつた。

さうしたこゝが、彼女にミつてミだけ、苦しかつたか、腹立たしかつたかは、改めて云ふまでもないこゝである。

兎に角、彼女は——戀に精魂を失つた彼女は、戀人に逢はれないこゝが、死んで行くよりも、辛いこゝであると思つた。否、それ程烈しく悶えたのだつた。

で、絶えず戀人の面影を空に描いて、過去の樂しかつた、語らひを想像しては、満にあこがれるのであつた。

此塵空想が、だんくご潮のやうに消えて行くに従ひ、此度は恐ろしい心の焦燥を感じ、烈しい苦悶の境に入るのだつた。そして其の苦悶の境に入つた場合は、必ず母を恨み、可川を憎み、徳子を罵つたりするのであつた。

「ごうしてお母さんは妾をいぢめるのでせう。妾がごうして其塵に憎いのでせう。満さんごの結婚が何故に悪いのでせう。可川さんは何故に妾の味方をして呉れないのでせう。妾をいぢめるやうなごをごうしてするのでせう。徳子さんは何故に妾に辛く當るのでせう。妾が満さんご結婚するのが羨ましいのか知ら」

此塵ごを幾度ごもなく繰返しては、名狀しがたい苦悶をするのであつた。そして其の結果は、母に辛く當つたり、召使の者には八つ當りに當り、散らし、徳子に喧嘩を吹きかけたりするのであつた。

が、誰れ一人ごして、彼女に逆らふ者はなかつた。只母が時々父の靈前に伴つて、辯々ご説きついたりした。が、戀に狂つて居る彼女には、母が百萬さらを並べても、石佛に説法、馬の耳に風の吹き流しご、云つたやうに、何等の効果も、効能もなかつた。

「お母さん、私は誰れが何ご云つても、心にもない人ご結婚するごは出来ませんわ、ですからごうか、満さんご一緒にして下さいな、ね、お母さん！ お願ひですから」

戀しさ懐かしさに、えた結果は、娘氣の羞づかしさをも、顧みず此塵ごを言ひ出した。母はさうしたごを聞く度毎に、腸でも断たれるやうな、恐ろしい苦痛を胸に感づるのであつた。

それは單に満この關係を憎悪する許りでなく、娘の心のいちらしさを察するからであつた。否、満を憎悪すればする程、それと反對に娘の境遇がいぢらしく、痛々しく感じられてならなかつたのである。

それに浮世の義理として、其の切なる娘の願ひを素氣なく、拒絶しなければならぬ。いさば、母として實に苦しいことには相違なかつた。浮世の義理さへなければ、縦令「米ごうならうとも、可愛い娘の切なる願ひを入れて遣らう程に——斯う思つたことでもないでもなかつたが。臆いて冷たい理性が、ムラ／＼と胸に浮び、さうしたことは端なく覆されるのだつた。それは満の人格を疑つたからである。満と結婚したとしても決して、娘は幸福な世渡が出来ないと思つたからである。

「お前は何故其麼に頑固なこゝ許り云ふのです、何時まで其麼こゝを云つてるんで

す、幾らお前さんが強情張つても、可川さんは御承諾なさらないよ、可川さんが御承諾して下さらなければ、何と言つたつて駄目ですから、もう良い加減に強情張ることを止しなさい、それがお前さんの爲ですから！」

母は心の裡で泣きながら、可川をダシに心にもない、頑固なこゝを云つて、娘を窘ませやうと努めたのであつた。が、それは無益だつた。

「厭です！ 厭です！」と、彼女は烈しく首を振つて叫びながら、尙も語を續けた。

「誰れが何と言つても、私は私が思つた道に進みます……人の犠牲になんか私はさうしてもなれません！ 其麼馬鹿なこゝは妾には絶対に出来ません！ お母さんだつて、可川さんだつて、私を精神上に殺さうとして被居るんですもの！ 私は飽くまで戦ひます！ 戦つて眞實に死にます！ 屹度死んで見せます！」

斯う云ひ切つたかと思ふも、堪えられないやうな、聲を擧げてサメムく泣き出したので、遺に母も二の句が續けなかつた。否、此の上娘にさからうところが害あつて、益のないものであることを覺つた。で母は其の儘沈黙して了つたのである。

母は純日本式の、良妻賢母たる人であつて、人一倍に義理堅い、潔癖な女性である。そして經濟的觀念にも、富に對する執着心も、普通以上に發達して居るのである。が、娘はさうしたところには、何等の共通點も、妥協性も少しも持つて居なかつた。さうだ生れた時代が違い、人が違い、そして感情も、思想も、黒白のやうに甚だしく異つてゐた。

それに今一つの大きな悲劇は、彼女が世間の何ものをも、知らない彼女が淡雪のやうな、否、燃ゆるやうな戀の爲めに、精魂を失ひ、女性の慎まやかさ、娘氣の羞恥心

さうしたことを總て、忘れたやうに、無謀に亂暴に當り散らす云ふことだつた。

勿論英子自身にまつては、親にも身にも、代へられないと思つた、戀人は遠ざければ、監禁同様に母の冷やかな眼の下に、嚴重に監視されてゐることは、苦しいことには相違なかつた。氣も心も張り裂けるやうな、恐ろしい悶々の裡に、月日を送らねばならなかつた。

で、彼女の心は日に月に、自然々々悪化される許りだつた。

さうしたところが、募り募つて來るに、性來我儘に育て上げられた彼女には、理性に因つてそれを抑へ得ることは、到底出來なくなつた。戀人を慕ふの念が、焔の燃へ行くやうに、だんくく手許に迫つて、もう身動きも出來ないまでになつた。

戀人、何等の關係もない、男性の聲が聞えても、それが戀人のやうに思はれて、一

層戀しさを増やうなこころは度々あつた。

「満さんは今頃、何をしてゐられるであらう。定めし淋しく月日を送つてゐられるであらう。自分のやうに恐ろしい、心の焦燥を感じてゐられるであらう。淋しさ、戀しさの爲め烈しく悶えてゐられるであらう。噫！逢いたい、逢つて楽しい話がしたい。そして思ふ儘、いたはつてあげたい」

其處こころを思ひ出すと、立つても坐つても、ゐられない程、烈しく焦ら立つて何んこしても狂亂せずにはゐられなかつた。

暫くするに、戀人の面影が眼前に現れて、媚びるやうな美しい、微笑みを送るのだつた。

「噫！満さん……わ 妾、逃げ出します！ 屹度逃げ出して貴下のお側へ行きます

す！必ず行きます！」と、我を忘れて叫び出すのであつた。

さうしたときには彼女は全く痴呆かなんかのやうに、狂ひ廻るのだつた。が、聴て少し時を経るに、其の昂奮状態が、だん／＼消え行き、元の従順さまでには行かないが、稍冷靜な頭になるに、又しても戀人のこころを考へ出して、狂ふのだつた。

丁度彼女が満と逢つてから、十日目の朝だつた。彼女は恰で病人かなんかのやうに、眞青な顔して床から這ひ出た。そして何氣なく戸を開けて見るに、一夜の間に人知れず降り積つた雪は、白く美しく、野も町も村も銀世界をなしてゐるのであつた。

冷や／＼と耳を衝くやうな、冷めたい北風に吹かれながら、彼女は考へ込んだ。

「妾も雪のやうに人知れず、満さんの所へ行きたい雪が降り積るやうに誰も知らない中に逃出したいさうかして家を出たい。そして満さんの所へ行きたい」

さう思ふに寒いことも、冷めたいことも、恐ろしいことも、怖いことも、凡てのことを忘れて了つた。只一圖に行きたい、逃て行きたい。それだけしか、何事も考へられなかつた。

臺所の方で女中達が無邪氣に高らかさ、笑ひながら、何やら語り合つてゐるのでさへも、彼女には腹立しくもあり、羨ましくもあつた。

それから先きは、さう云ふ氣持ちで、さう云ふ風に、逃出したのか、彼女自身でさへも能く判らなかつた。それだけ激しく昂奮してゐたのであつた。が、それでも我家を逃出てから、約五六丁程歩いたときは、何もなく氣が咎めて、後髪でも引かれるやうな氣がしてならなかつた。さうだ、泥棒でもしたやうな恐ろしささ、不安さを感ぜずにはゐられなかつた。

兎に角、斯うした順序で、英子は遂に我家を棄て、戀人満の許に走つたのであつた。

四、無邪氣な心 (其上の事)

家々の軒燈は瞬く間にこもつた。秋の月は皎々として、野も、山も、町も、隈なく美しく照し、彼女の室の窓に迫つてゐた。

十四歳ミ云ふ未だあざけない可愛いらしい、英子は一人讀書に、耽つてゐた。が、聴てあきが來たので、

「お母さん、満さんの所へ行つて遊んで來ますわ」ミ、無邪氣に何等のわだかまりもないらしく、可愛らしく明瞭した聲で云つた。

母は夕刊に釘付けされた眼を些つミ、彼女の方に向けて、

「エ、行つて行らつしやい、だけぎ餘りお邪魔しちや不可ませんよ」ミ、軽く肯づきながら答へた。勿論母には娘を疑ふ餘地はなかつた。さうだ、絶對的に娘を信じ娘の自由に放任してゐたのであつた。

で、彼女は潑刺ミ、無邪氣な態度で、其場を去つた。そして満の部屋に駈けるやうに這入つた。

「兄さん、何して被居るの、勉強して被居るの」

彼女はさう言ひながら、窓の所へ寄り添ふて、清い月に照されてゐた。

満は読みかけてゐた、書物を棄彼女の方へ眼を廻しながら、

「何、別に勉強もしてませんよ、退屈で困つてゐるのですよ」ミ、微笑みながら言つた。

英子は安心したやうに表情で、

「あら、さう——」ミ、可愛らしい眸を満の方へ向けながら、肯づきつゝ云つた。そして急に思ひ出したやうに、

「好い月ですわね」ミ、云ひく彼の方へ向けてゐた、眼を外に向けて、空を仰いだ。

「眞實に好い月ですね、秋の月は格別ですね」ミ、満は共鳴して、英子のやうに空を仰いだ。

「兄さん少し散歩しませうか、だけぎ外は寒いでせうね」ミ、彼女は何の躊躇もないらしくつけぐゝ云つた。

「さうね、行きませう」

「ちや、妾着物を着替へて来るわ」

彼女がさう云ひく、去らうとしたので

「それで好いちや有りませんか」
彼は咎め立てでもするやうに云つた。

「でも、外は寒いでせう、袷ですもの」
彼女は云ひつゝ、襟を掻き合せた。

「なに、まだ十月ですもの、寒いものですか、大丈夫ですよ、行きませうよ」
満は
急き込むやうに云つて、彼女の顔を見た。

「さうね、ぢや此の儘行きませうね」
云ひながら彼より先に室を出た。室を出る
と同時に、

「だけさ、お母さんに些つこさう云つて来るわ、ですから、少し待つてゐて下さい
な」
云ひ切つて身も軽々しく、いそぐして去つた。

間もなく再び現れた。で、満は些つこ不安さうに、

「お母さんは何言ひましたか」
彼女の顔をしみぐぐみ、見ながら訊いた。

「何とも言ひませんわ、只「早くお歸り」つて仰有つただけなの」

彼女は辯解でもするやうに云つたが、依然として潑刺な無邪氣な態度だつた。

「さう、ぢや行きませう」

彼はかう云ひ切つて、元氣能く立ち上つた。

で、二人は何處へ行くこ云ふ當もなく、ぶらり表へ出た。そして郊外の方へ歩き
出した。

多く家に許り籠つてゐる彼女が、晴々とした郊外へ出たので、恰で大海に泳いで
る鯛のやうに、自由な、潑刺とした——如何にも愉快な氣持ちになつた。

月は皎々として冴え渡り、下界の總てを照し、恰も晝か疑はれる程だつた。其の

清い高い月に照されながら、二人はそれからそれへこ語ひつゝ、的もなく歩いてゐるのだつた。

「ね、兄さん、來週から有樂座に童話劇があるつてね、妾行かうと思つてるの、兄さん行かない、そりや面白いさうですよ」

彼女は突然此處こゝを云ひ出した。そして心の裡で「兄さんも一緒に行つて呉れ、はいいが」こ思ひながら、彼の顔を覗くやうにして見上げた。

「さうね、行つても好いさ、面白ければ」

彼が餘り乘氣のしないやうな、調子で云つたので、彼女は一生懸命になつて、彼の心を惹いた。

「エ、そりや大層面白いんですつて、妾お友達の方から聞きましたわ、何でも米

國で有名な方がお作りになつたんですつて、だから、好く出来てゐるさうですわ、兄さん行きませうよ、日曜にでも」

彼女が餘り熱心に云ふので、彼も遂に動かされ、

「エエ、行きませう、だけごお母さんもお出になるんでせう」こ、意味あり氣に訊いた。

「さうよ、お出でになるの、ですけれど兄さんがお出でになるんでしたら、お母さんはさうか解らないこゝよ」こ、彼女は何の意味も考へず云つた。が、満には其の言葉が何さなく氣になつてならなかつた。

「僕が行けば、さうしてお母さんがお止めになるんですか」

彼は不審さうに——腹立たしさうに訊いた。が、彼女は何事も考へないやうに、

「お母さんはお芝居が餘り好きでないし、それに此間から、気分が優れないんですつて、ですから、兄さんがお出でになるんでしたら、お母さんはお止めになるかも知れませんわ」こ、無邪氣な調子で云つた。其の言葉を聞いて、彼は俄かに元氣づいたやうに、太いステッキを勢能く振ながら、

「あゝ、さうですか、兎に角行きませうよ」

こ輕快さうに云つて、振て居たステッキで、往來の枯れ草をなぎ倒した。

「ぢや、何日行きませうか、兄さんは何日が好いの」こ、彼女はさも愉快さうに、可愛らしく首を傾むけながら、彼の顔を枕つて見て居た。

「さうね」こ、云つて些つこ考へ込むやうにしたが、間もなく、

「僕は何日でも關ひませんよ、英子さんの都合の好い時行きませう」さう云ひく

前のやうに面白さうに、枯れ草をなぎ倒して居たのであつた。

「妾だつて何日でも好いのよ、ですけご學校へ行かなくちやなりませんから、なるべく日曜の日は好いわ」こ、彼女は満の顔色を窺ふやうにして言つた。

「それぢや、來週の日曜日にしませうね」

彼はさう云ひ切つて、思ひ出したやうに歩き出した。彼女も彼に遅れじこ、平行して歩き出した。

男心こ秋の空——先刻まで皎々こ冴え切つて居た、清かつた月が俄に、黒い雲の爲に、見るく間に、闇に近い程暗くなつた。

「あら、大層暗くなつたのね、怖かないわ、早く歸りませうよ」

彼女は急に物凄くなつたので、斯う云つて思はず、満の腕に縋つた。彼は優しい小

て歩き出した。

男心こ秋の空——先刻まで皎々こ冴え切つて居た、清かつた月が俄に、黒い雲の爲に、見るく間に、闇に近い程暗くなつた。

「あら、大層暗くなつたのね、怖かないわ、早く歸りませうよ」

彼女は急に物凄くなつたので、斯う云つて思はず、満の腕に縋つた。彼は優しい小

さな手を握りながら。

「英子さん、何云つてゐるんですか、何も恐ろしいことは有りませんよ」こ、打消すやうに云つた。が、彼女は尙も不安さうな、落附のない表情をして、

「でも、何だか恐ろしくなつたわ、早く歸りませうよ」こ、迫るやうに云ふので、

「ぢや、歸りませう」さう云つて彼は振り向いた。そして歩きながら、

「英子さんは案外臆病者だね、これつ許かしのこゝで、怖つかないなんて」こ、云つて嘲笑的に笑つた。

「そりや、女ですもの、兄さんご違つてよ」

さう云つて、彼女もニツコリ笑つた。最早彼女の心には、恐怖云ふことは、少しも残つて居なかつた。で、固のやうな無邪氣な、快活な、表情でいそぐしく歩いて

居た。

「幾ら女だつて餘り小膽すぎますよ」

「でも、まだ子供ですもの、怖わがるのは當然へだわ、此處に暗くなつたんですもの」

さう言ひながらも、何もなく極り悪さうに、軟らかく身體を左右に、グナリ／＼と振つて居た。そして俯目勝に、彼の顔をチラミ見た。其の表情は實に、愛らしく、而も、無邪氣であつた。

で、彼の感情は發作的に、昂奮し堪えられない程、戀しさを覺えたのだつた。――

こ言ふよりは、彼女の無邪氣な、而も、愛らしい、美しい表情が彼の感情を惱殺するだけの力があつたのだ。兎に角、彼はムラ／＼と發作的に、昂じ来る烈しい感情を押

へる力なく握つて居た手を急に放し、彼女のフツクリこした肩に手を掛け、心持強く引き占めたのだつた。

「あら！ 厭ですよ！」と、彼女は強くそれを振り放さうとした。で、追に昂奮して居る満も、仕方なくそれを放した。

さうしたものの、彼女は眞赤な顔して、「厭な人ね」と云つて彼を睨みつけた。満は夢から覺めたやうに、急に元氣なく頂垂れた儘、黙々として居た。

で、二人は暫らく沈黙の儘、ぶらぶらと歩いて居たが、英子は急に氣の毒になつたので、

「兄さんさうしたの怒つたの」と、宥さめるやうに云つて、彼の顔を見上げた。

「さうもしましませんが」と、投げ出すやうに言つてあらぬ方を眺めて居た。

彼女は益々心配らしく、

「兄さん、勘忍して下さいな、私が悪かつたんですから、ね、兄さん好いでせう」と、詫び入るのだつた。で、彼は辯解でもするやうに事務的な口調で云つた。

「僕は何も怒つてやしませんよ」

さう云ひながらも、まだツンとして居た。

「でも、何だか怒つて居被るようですよ」

彼女は甘へるやうな、訴へるやうな口調で云つた。そして前のやうに身體を揺ぶつて居るのだつた。

彼女は心の裡で、色々なことを考へて、彼の憤りを恐れて居た。それは若し満が、實際に怒つたのであつたら、これまでのやうに、親しんで呉れないであらう、學問上

の質問にも、應じて呉れないであらう。先刻約束した芝居見物にも、行かないであらう。其塵詰まらないこころを考がへ出したので、何にしても詫びずには、居られなかつた。

「ね、兄さん、眞實に赦して下さいな」

さう云ひつゝ、彼の手を執つて、迫るやうにした。そして凛々しい、美しい、眸を彼の顔に展じた。

さう云はれて見るこゝ、今更彼をしても、素氣なくも云へなかつた。

「英ちゃんは馬鹿に疑い深いんだね、怒つてやしないと言つてるに」

此度は以前よりも、熱情のある言葉だつた。で、彼女も急に安心したらしく、

「眞實に怒つてないの」こゝ、肯こづくやうにして、ニツコリ笑ひながら云つた。

「僕の方が悪かつたんです、さうか勘忍して下さい」こゝ、彼は如何にも、面目なささうに頭を掻きながら、詫びるやうに云つた。

「イ、エ、さうでないわ、妾の方が悪いのよ」こゝ、彼女は氣嫌でも取るやうに、云つて、妙な嬌態をした。

其の時はもう明るい町に這入つて居た。さうだ、赤銅色の電光が、キラ／＼と、二人の姿を照して居た。けれども、二人は矢つ張り握手した儘だつた。

で、若い學生なごが、チロ／＼見て、行き過ぎるのが、彼女には何もなく、極り悪くてならなかつた。が、彼の意に反して、それを振り放すだけの、勇氣はなかつた。恥かしい、極りが悪い裡にも、何もなく愉快なやうにも思はれたのである。

只心配なのは、若し友達に見附かりはしないかこゝ、云ふ不安であつた。がそれも次

のやうな解釋に、因つて端なくも撃退して了つた。

「なに、別に極りの悪いこゝでもない、他人なれば兎に角、從兄妹同士である、殊に満さんとは一緒に居て兄妹のやうに親しんで居るのだ。全く兄さんのやうに思つてゐるのだ、だから何も恥かしいこゝではない」

此處こゝを考へながらも、それでも、矢つ張り顔だけは赤くしてゐた。

満はだんくく快活さうに、話しかけるが手を握られてゐる、英子は何もして、以前のやうに、潑刺して語り合ふこゝが、さうしたものか出来なかつた。動もするこゝ眞赤な顔して、沈黙を守り羞づかしさうに俯向ひて了ふのだつた。

斯うした心の苦痛——それは不快の爲の苦痛ではなかつた、さうした苦痛を感じながら、我が家へ歸つたのであつた。

其の日から、彼女は色々なこゝを考へたり、思つたりするやうになつた。それは言ふまでもなく、初戀の兆だつた。で、戀は子供らしい、無邪氣が去り、世間に取りふれた、戀をするやうになつたのである。

五、動揺する心

英子は多血性で、早熟の娘であつた。そして天才的才能を有する娘であつた。多血性で天才的才媛である以上、早熟であるこゝは、多く言ふまでもない事實である。兎に角彼女は遂に、満に戀する身になつた。それは心に取り止めのない、淡雪の芽生へのやうな、強い、鋭い初戀の流れたつた。が、彼女の全身に流れてゐる血染にも、心にも嗜好にも、凡てに變化があつたさうだ。

が、其の戀は心の底から、湧いて来た、清い戀であるだけに、容易に表現されなかつた。こ云ふよりは、人知れず悩むたのであつた。

で、二人の語りひも、これまでのやうに、無邪氣な、何等のわだかまりのないものではなくなつた。一日々々日を經るに従ひ、世間にありふれた戀語りに變つて行くのだつた。そして殆ど毎晩のやうに、散歩するのであつた。

「ね英ちゃん！ 外へ出るこ氣が晴れぐししますね」こ満は以前こは異つた、親しみのある言葉を利いた。

「眞實にさうですわね、妾、家内に許り居ますこ頭がボツこして了ひますの」彼女の言葉使ひもがつかり異つて居た。これまでのやうに、無邪氣な言葉でなくなつた。同時に最早兄さん」こ呼ばなかつた。

「僕も矢つ張りさうなんですよ」こ、満はニツコリ笑ひながら、さも輕快さうな表情で云つた。

彼女は至極満足らしい表情で——併し何もなく羞づかしさうに、妙な態度をして、身體を可愛らしく、揺ぶりながら、

「それに妾、家内にゐては落附いてお話しが出来ないんですもの」こ、云ひ切つてから彼の顔を愁波に見て、又急に俯向いた。

「さうね、徳子なんつて、邪魔者がゐるからうかつこ話しもしてゐられませんかよ」

「眞實ですわ、妾、徳子さんが大嫌いなもの、おせつかいで、意地が悪くて、お負に焼餅焼ですもの、妾、全たく彼處方は嫌いですわ」

英子は如何にも、徳子を憎らしさうに、つけくこ罵つた。それも其の筈である、

徳子は英子よりも、五つも六つも年上でありながら、まだ青年に親しく語り合つたことのない。何邊か云へば叔母に、能く似た性格の女だつた。それに少しヒステリー気味なので、動もするこゝ、二人の間を避かせやうとしてゐたのであつた。

さうしたこゝから、彼女との折合は悪く殆ど犬猫のやうに、睨み合ふやうになつたのである。で、或ときは叔母に彼等二人の關係を誇大的に、告げたこゝもあつた。が、叔母は娘を絶対に信じてゐたので、徳子の言を用ひず。彼女の言ふがまゝなすがまゝに放任して置いたのだつた。勿論其の時には、身體上には變化がなかつた。

兎に角、徳子にこつては彼女と彼とが、餘りに仲が好過ぎるので、幾らか嫉妬的態度を持つてゐた。で、勿論満の陰口なさは、大いに言つたのだつた。それが又彼女には堪えられない程、腹立たしかつたのである。

「無論誰だつて彼を好く者はありませんよ、考がへて御覽、徳子は二十二ぢや有りませんか、それにまだ誰からも貰ひ手がないぢや有りませんか」

満の言葉に一層元氣づいたやうに、英子は急に興奮して、

「それにね、満さん、貴下の陰口で大變ですよ、妾、眞實に口惜しくてくゝならないんですの」こゝ、語尾を強めて、さも腹立たしさうに云つた。

さう云ふ彼女の顔は、徳子に對する烈しい憤怒、強い悔蔑の爲め、瞬時に眞赤になつた。

「何言つてますか！」

満の態度も英子の態度も、同じだつた。否、より以上に緊張した態度だつた。

「あのね、貴下を悪魔だとか、色魔だとか、そりや勝手なこゝ許り言つてゐるんですの

よ、随分ですわね」

さう云つて満の顔色を窺ふやうに、些つと見て語を續けた。

「ですから、妾、何時でも喧嘩許りしてゐますの、餘り失禮ですもの」云、臉に露を宿しながら、さもく口惜しさうに、言ふのだつた。

勿論、心の裡では、それ以上に口惜しかつたのである。自分の愛する戀人の陰口を利かれることは、自分を悪く言はれるよりも、より以上に、腹立たしく、口惜しかつた。心の底を抉られるやうな、恐ろしい口惜しさを感じたのであつた。

だから戀人に向かつて、それを訴へるのも可なり腹立しく、口惜しかつたのである。——言ふのは少し訝しいやうだが、事實口惜しく悲しかつた。それは徳子を憎むの餘り、さうした心の苦悶を感じたのであつたらう。

所が満の方では、安外落附いた態度で、

「馬鹿にしてやがる」云、吐き出すやうに云つたが、左程口惜しいやうにも、思はれなかつたので、英子は何もなく、物足りないやうな、不満な氣がしたので、

「随分ですわね、女の癖に男の陰口なんか言ふなんつて、眞實に圖うづうしいぢやありませんか、貴下怒つてあけなさいよ」云、訴へるやうに——煽動するやうに云つて彼の心を引いた。けれども、彼は笑ひながら、

「彼魔奴が言ふことを一々氣にした日にやしやうが有りませんよ、彼奴は焼いてるんですよ、可愛いさうに、アハ、、、、」云、輕快さうに、戀の勝利を誇るやうに笑つたが、彼女は只笑つて許りは居られなかつた。

「ですけぞ、餘り失禮なことを許り言ふんですもの、偶には怒つて遣つた方が好いわ、

貴下のやうに温和しく許りして居被る。つけ上がつて何を言ひ出すか知れませんわ」
 彼女は徳子に對し満が怒るやうに努めたが、期待したやうには、却々怒り出さな
 かつた。動もするに笑つて、「焼き餅焼きたから相手にしない方が好いですよ」言つ
 て、彼女の言葉を斥けるのであつた。

斯うした語らひの裡に先頃英子が恐ろしがつた。人通のない淋しい野原へ出たが
 何うしたものか先頃のやうに——否、少しも恐ろしがらなかつた。さうだ、心がソハ
 くして、恰で庭でも歩いてゐるやうな、心持ちになつて、愉快に、快活に語らひ合
 つたのだつた。

で、満は思ひ出したやうに、

「英ちゃん、今日は怖く有りませんか」ミ、笑ひながら訊いた。

「エ、ミ、彼女は微かに云つて、軽く肯づいた。そして彼の顔を盗むやうに、見て
 から、

「貴下と一緒にですもの、少しも怖くないわ」ミ、極り悪さうに俯向いた。
 満は如何にも得意らしく、

「ちや眞女は僕と一緒になりや、何處だつて怖くありませんか」さう云ひながら、眞蒼
 な顔して、急に彼女の手を執つた。彼女はそれを固く握り替へしながら、

「エ、貴下二人なら、妾何處へでも行きますわ、少しも恐ろしくないんですもの」
 ミ、さも極り悪さうに、俯向ひたなり。顫え聲で云つた。

其の瞬間、彼女は、嘗て経験したここのない、妙な壓迫を胸に感じた。で、胸がワ
 ククして、舌の根が強ばつて、思ふやうに言葉が出来なかつた。握り合つてゐる手

は中風のやうに、ワナ／＼と顫え出した。が、何もなく、快好い、痛快な苦痛だった。満も略同じやうな、心の痛快さを感じながら、吃るやうな口調で云つた。

「英ちやん、そりや眞實ですか、眞實にさうなんですか、若し英ちやんが眞實にさうでしたら、僕は嬉しいです」

彼は烈しく心臓を鳴らしながら、迫るやうに云つて、急に停んだ。そしてワナ／＼と大きく顫えながら、彼女の肩を強く抱き占めた。が、女は別にそれを拒むやうな態度もせず、される儘にしてゐた。さうだ、俯向いた儘、彼が引き占める儘に、べたりと身體を彼に、凭せたなり、枕つこしてゐた。

で、暫く二人は、夢見るやうな氣持になつて、快よかつた。二人とも、唯何時までも、其の快よい状態を續けてゐたかつた。

さうした快よい状態を續けてゐる裡は、二人の頭には、何物も浮かんで來なかつた。殊に世の中のここに付いて、盲目だった英子は、過去も、現在も、將來も、考へるこゝが出来なかつた。浮き立つ許りの、戀の高鳴りに、酔つてゐたのだつた。満は尙も吃り勝ちに、

「ね、英ちやん、僕の心持ち判つてゐるでせう、僕があんたを何んと思つてゐるか判るでせう！」と、語尾を強めて云ひつゝ、又しても力一杯引き占めた。英子は固くなつて、

「エ、判つてますわ」と、微かな顫え聲で答へた。が、其の聲は何んもなく、力の籠つた熱情のある聲だった。

彼は益々昂奮して、ワナ／＼と顫えながら云つた。

「僕もあんたの心持が能く判つて居ります、ですから同盟しやうぢや有りませんか」
 さう云ひく、烈しく身顛ひしながら、肉も、骨も、砕けよこ許り固く抱き占めた。
 で。彼女は烈しく鳴り響く男の胸に、ぐたりこ垂れかゝつて、赤らむ顔を埋めてゐた。
 間もなく無言の裡に、二人の唇は結び合つた。
 斯うしたこゝこがあつてからは、二人の心は烈しく動揺した。殊に英子の方は、平和
 に宿つた初戀の兆なので、男以上に熱烈だつた。今逢つた許りであるにも拘らず、些
 つこでも離れてゐるこゝ、もう淋しくて懐しくてならなかつた。で、幾度こもなく、母
 の眼を盗んで、彼の室に忍び入るやうにして這入つて行くのだつた。
 が、厳格な母は、こゝした不行跡な娘の行爲を、何時までも、黙認してはゐなかつ
 た。否、彼女の従姉妹である徳子が、早くもそれを知つて、彼女の母に其の都度、報

告するのだつた。で、母は娘に絡まる多くを心配し、暗に二人の仲を遠ざけやうとし
 た。さうだ、今までのやうに、放任主義でなく、嚴重に警戒し監督を怠らなかつた。
 が、それは無益だつた。否、さうした嚴重な警戒——監督を厳にすればする程、愈
 娘の心を焦ら立たせ、益燃ゆる戀地を煽ぎ立てるこゝこゝなつた。
 兎に角、母の嚴重な警戒こゝ、監督の下にある彼女が、如何なる隙を見出してか、電
 の閃めくやうに、満との構曳が間斷なく續けられたのであつた。で、さうく二人の
 間には、黒い影がさし、最早取り返しのかないこゝこになつた。
 所が彼女の母は満に對し、好感を持つてゐない許りでなく、鋭い厭厭こ、強い憎惡
 こを持つてゐたので、益二人の仲を遠ざけるべく努力したのだつた。否、母は満の
 寄寓を拒絶し、二人の仲を漸く遠ざけたのであつた。

六、曇る心

戀せる二人は樂しかつた。が、それは僅二三ヶ月だつた。遂に別れる日が來た。否、母の爲に戀人を遠ざけられ、二人の間を離隔されて了つた。で、従つて逢ふべき機会も日増に薄らんだ。けれども、彼女の心は、それと反對だつた。逢ふべき機会がなければないだけに愈戀しさこ、懐かしさを益許りだつた。

さうだ、母が嚴重に、彼女を取締れば、取締る程、彼女の心は益焦ら立つて、立つても、坐つてもゐられない程に、心の焦燥を感じたのだつた。で、戀に精神を失つた英子は、我儘に育てられた英子は、さうした心の苦悶を理性に因つて、何時までも抑へてゐるこころは、到底出來なかつた。或時は母の隙を窺つて婿曳したり、或時は母

を欺ひて、密會したりした。

斯て二人の間は、間斷なく婿曳が續けられてゐた。が、それも永くは續かなかつた。云ふのは彼女の母が、嚴重な監視を怠らない許りでなく、今一つ二人の關係に付いて、一大蹉送が引き起つたのであつた。それは外でもない、戀人満の入營期が迫つて來たこころだつた。

で、彼女は別れに際し、戀人を訪づれ、戀人の胸に、眞白な美しい、顔を埋めながら、サメムと泣いたのであつた。

「ね、満さん、妾、さうしたら好いんでせう、貴郎が入營なすつたら、私、困つちまいますわ、お母さんが早くお嫁に行けと仰有るんですもの、眞實に困つちまいますわ」
彼女は斯う云つて、堪まらないやうに、一層烈しく泣き出した。

泣きながらも彼女は、ごうかして満さんご結婚がしたい。一日も早く結婚がしたい。假令母が何と言つても、満さん以外の人ご結婚することは出来ない。絶対に出来ない。さうだ、自分の感情に適しない人ご、結婚することは死んでも出来ない。殺されても嫌だ。

さう思ひながら、彼の手を堅く握つた。満はそれを握り替へしながら、

「そりや、苦しいでせうが、永い間ではないから辛抱してゐて下さい、一年後には屹度一緒になりますから、ね、英ちゃん、好いでせう、一年だけ辛抱してゐて下さい」
ご男は宥めるやうに云つて、力なく口を緘んだ。

彼女が絶対に信じてゐる戀人から、さう優しく云はれるご、情的な英子はもう何事も言へなかつた。さうだ、假令ごんな大きな不平があつても、其の不平を訴へるだ

けの勇氣は出なかつた。

「エ、能く判りましたわ、ですけご一年つて永いわね」ご、ホロ／＼聲で云つて、又泣き出した。

嬉しい時の一日は短いが、悲しい時の一日は、嬉しい時の一ヶ月よりも永い。まして一年ご云ふ永い間、涙で活さなければならぬと思ふご、彼女の小さな胸は、張り裂けるご云ふよりも、じ首かなんかで扱られるやうな恐ろしい苦痛を感じたのだつた。

「ナニ、一年位は速ぐですよ、過ぎ去つた一年間を考へて御覽よ」

相手は事もなげに云つてゐるが、彼女はごうしても、さう断念することが出来なかつた。

過ぎ去つた一年間は、比較的嬉しい月日であつた。で、それご同じやうに思ふごご

嬉しい時の一日は短いが、悲しい時の一日は、嬉しい時の一ヶ月よりも永い。まして一年ご云ふ永い間、涙で活さなければならぬと思ふご、彼女の小さな胸は、張り裂けるご云ふよりも、じ首かなんかで扱られるやうな恐ろしい苦痛を感じたのだつた。

「ナニ、一年位は速ぐですよ、過ぎ去つた一年間を考へて御覽よ」

相手は事もなげに云つてゐるが、彼女はごうしても、さう断念することが出来なかつた。

過ぎ去つた一年間は、比較的嬉しい月日であつた。で、それご同じやうに思ふごご

は、さうしても出来ない。否、それは正反對の境遇に泣かねばならないのだ。

「そりや、さうですけご、過ぎ去つた一年は貴郎と一緒に居られたんですもの、それと同じやうには思はれませんわ」

さう云ふ彼女の頭には、早過去の樂しかつた——嬉しかつた。多くの事實がマザく、浮かんで云ひ知れぬ懐かしさ、悲しさを感じたのだつた。

彼の時は樂しかつた。此の時は嬉しかつた。が、これからはそれと反對なんだ。樂より苦に進まねばならないのだ。

かう思ふミムラく、昂じ来る悲哀の念は、何にしても抑へ切れなくなつた。否、一層悲しさが増て、新な涙が玉の露になつて、雨のやうに零れるのであつた。

「併し今更何と云つても仕様がなから、断念めて下さい、其の代り僕が歸つて來

たら、必ず一緒にになりますから」

相手は何處までも慰めるやうに、優しく云つて彼女を傷はつたのであつた。

彼女は戀人から、一緒になる。夫婦になること云はれるのは、何よりも嬉しかつた。

心に取り止めのない、まだうら若い娘に取つては、確に嬉しいここに違ひなかつたが、一年の間、涙で暮さなければならぬこと云ふことが、さうしても心の底にこびり附いて、動もする涙多い彼女を泣かせるのだつた。

「私眞實にそれ許り祈つてますの」

其の聲は嬉しさうに思はれた。そして急に元氣づいたやうに、面を上げてニッコリ微笑むだ。

満は何を思つたのか、俄に顔色を變へて、

「英ちゃん！」「ご、叫ぶやうに呼んだ。そして身體全體に力を入れて、

「お母さんが何ぞ仰有つても、誰が何ぞ云つても、僕が歸つて来るまで何處へも嫁つちや不可ませんよ、必ず嫁つちや不可ませんよ」「ご、調子を強めて命令でもするやうに云つた。

「そりや、大丈夫ですわ、私、死んだつてお嫁になんか行きませんわ！」「ご、満の言葉に應ずるやうな語調で答へた。

「無論、僕は英ちゃんを信じてゐるんだが、それでも女だから、お母さんに口説かれたりなんかするご、つい心にもないごを云ひ出すからね、心配だよ」

此度は前のやうに力強い聲ではなかつたが、それでも熱情は溢れてゐた。

「満さん、そりや、大丈夫よ、幾ら意思の薄弱な私だつて、人の爲めに犠牲になん

かなりやしませんわ」

彼女の言葉はテキパキしてゐた。

「僕だつて英ちゃんは信じてゐるさ、だけごまだ君は如何にも若いからね、巧妙な手管にかゝつた日にや、ついフラクご動かされるからね、心の武裝が必要だよ」

男は注意的に云つたのだつたが、彼女はさう取らなかつた。自分を疑つてゐるのだご思つて、辯解するのであつた。

「貴郎には私の心が能く判らないのね、私、決して貴郎が思つて居被るやうな薄情な女でないわよ」

彼女は幾らか、腹立しさうに云つて、ツンとした。

自分がこれだけ思つてゐるに、ごうして満さんは私の心を解して呉れないのであら